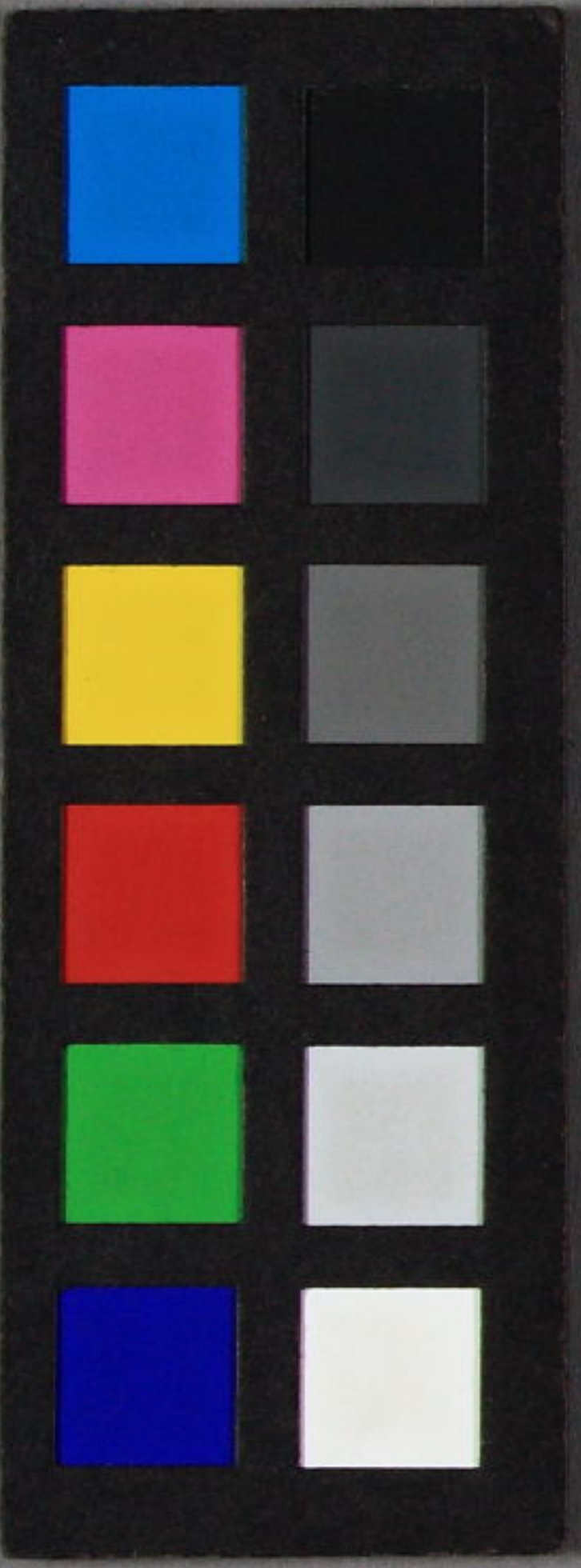


名譽新志

中

名譽

5  
44  
2



又學 5  
44  
2

服部元彰小傳

明治九年六月

重野安繹小傳

小河一敏小傳

服部元彰小傳

名譽新誌

第十一號

服部元彰

小引

此編主トスル所人ノ美ヲ成シ人ノ善ヲ  
獎ムルニ在リ故ニ上廟堂ノ偉勳鴻烈ヨ  
リ下閭閻ノ寸善小技ニ至リ聞ニ隨ヒ之  
ヲ記ス若夫一代ノ得失ハ棺ヲ蓋フテ論  
定ル且ツ善ヲ善トシ惡ヲ惡トスルハ世  
自ラ史筆ノ在ル有リ此編ノ關カル所ニ  
非ス

名譽新誌第十一號

重野安繹

君字ハ士德號ハ成齋厚之丞ト稱ス鹿兒島ノ藩  
士ナリ君初メ昌平覺ニ學フ才銳ニシテ學博シ

舍長タル者數年聲名隆々トシテ起ル島津侯擢  
ンテ、邸學ヲ督セシム既ニシテ君ヲ構スル者  
アリ君事ニ坐シテ薩ノ南島ニ謫セラル君益々  
力ヲ讀書ニ專ニシ其業大ニ進ム居ル丁數年赦  
ニ遇フテ歸ル會々英國ノ軍艦鹿兒島港ニ來ル  
其事島津久光公君命ヲ奉シテ英人ト應接ス談  
ノ小傳ニ見ユ

判未タ決セス兵端俄ニ開ク大ニ戰フ一ニ日ニ  
シテ英艦去ル是ノ時ニ當リテ朝廷詔シテ幕府  
及ヒ諸藩ヲ徵シ將サニ大ニ議スル所アラント  
ス島津侯朝廷ノ徵ニ應セント欲スレハ英人ノ  
再舉シテ來ランコトヲ慮ル英ト和セント欲スレ  
ハ天下方ニ膺懲ヲ以テ薩ニ望ム是ニ於テ君密  
命ヲ受ケテ横濱ニ赴キ英國公使ト論辨スルコ  
數回遂ニ和ヲ講シテ去ル島津侯因テ意ヲ上國  
ニ專ニスルコトヲ得タリ維新ノ後君浪華ニ教授  
ス明治五年始メテ朝ニ仕フ此ヨリ諸官ヲ經歷

シテ今一等修撰トナリ國史ヲ修ム君ノ學專ラ  
實用ヲ主トシ世ニ處シ人ニ接スル周匝ナラサ  
ルナク雅俗大小ノ事盡ク之ヲ舉ク世人歎シテ  
以テ及ハスト爲ス著ス所萬國公法和解編年日  
本外史等數種アリ君ノ昌平學ニ在ルヤ余亦此  
ニ在リ筆硯ノ交ヲ忝クス或人嘗テ君ヲ評シテ  
曰ク士德ニ七絶アリ曰ク博學曰ク文曰ク詩曰  
ク棋曰ク鼓曰ク美男子ト其一ハ余之ヲ忘レタ  
リ此言一時ノ戲ニ出ツト雖モ亦以テ君ノ多才  
多藝能セサル所ナキヲ見ツヘシ

小河一敏

君ハ豊後國ノ藩士ナリ彌右衛門ト稱ス癸丑以來外交ノ事起リ天下紛紜タリ君專ラ尊攘ヲ唱ヘテ藩議ト協ハス藩命アリ君ヲシテ隱居セシム然ルニ慷慨ノ名既ニ四方ニ馳セ四方ノ有志來リ訪フ者少カラス辛酉ノ除夕出羽ノ人清川八郎至ル之ト唱和ス君一絶ヲ賦シテ曰ク  
誰識丈夫心地清。世間一様只偷生。尊王大義辨來後。始可共談烈士情。  
八郎ハ倜儻ノ奇士ナリ後江戸ニ在リ人ノ爲メ

ニ殺サル壬戌ノ春君國ヲ出テ肥後筑後筑前ノ諸州ヲ經歷シ遍ク有志ノ士ト交ル久留米ノ人眞木和泉君ト意氣相投ス君之ト共ニ薩ニ入ラントト約ス既ニシテ故アリ和泉ハ期ニ先チテ薩ニ入ル君又薩ニ赴クト雖モ境關ヲ過クルヲ許サス君因テ熊本ノ藩士宮部鼎藏松田重助長人堀眞五郎ト共ニ天草ニ至リ此ヨリ薩ノ市來ニ航ス薩ノ家老小松帶刀ハ有馬新七田中謙助村田新八ノ三士ヲ遣リ君ニ接セシム君三士ト時務ヲ談シ且ツ古詩ヲ作りテ志ヲ述フ詩中ニ丹

誠所貫徹。狐鼠須辟易。一舉揭義旗。直解朝家厄。ノ  
句アリ以テ當時激昂扼腕ノ状ヲ想像スヘシ是  
時島津和泉今久光君上京ノ議既ニ決スト聞キ  
君即テ國ニ歸リテ政府ト相議シ同志ノ士十餘  
人ヲ率ヰテ大坂ニ至リ薩邸ニ寓ス時ニ四方ノ  
豪傑京攝ノ間ニ會シ大ニ尊攘ノ說ヲ唱フ朝廷  
モ幕府ヲ憚ル所アリテヤ浪士沈靜ヲ名トシテ  
和泉君ニ滯京ヲ命セラル在坂ノ壯士皆不平ナ  
リ有馬新七田中謙助ノ諸子相議シテ以謂ラク  
今ヤ事漸ク姑息ニ流レ機會將サニ去ラントス

所司代酒井若狹守ノ邸ヲ襲フテ之ヲ擊タハ士  
氣忽チ振ヒ大義將サニ伸ントスト議曰ニ決ス  
壯士數十人淀江ヲ溯リテ京ニ入ル君ハ故アリ  
薩邸ニ留リ將ニ繼テ發セントス其事泄レテ京  
師ノ薩邸ニ聞ユ和泉君大ニ驚キ遽カニ從士八  
名ヲ遣リ之ヲ止メシム有馬等ノ壯士未ダ京ニ  
入ラス伏水ノ旅亭ニ在リ八士之ヲ諭ス有馬田  
中ノ諸子聽カスシテ殺サル君伏水ニ達スル則  
チ諸子既ニ死セリ此ヨリ薩邸ニ寓シ岩倉大原  
ノ諸卿ニ謁シテ其所見ヲ陳シ專ラ尊攘ノ說ヲ

主張ス然リ而シテ藩主頻リニ歸國ヲ促ス君因  
テ歸ラントテ請フ朝廷其請フ所ヲ許シ且ツ書  
ヲ賜フテ之ヲ褒ス

此度勅使關東エ被指下候處叡慮之件々遵奉相  
成猶此未有志ノ諸藩一同志ヲ一ニシ夷狄掃攘  
皇國ノ御威德相輝叡慮貫徹候様有之度候岡藩  
ニ於テ小河彌右衛門一列當夏以來罷登島津三  
郎勤王之忠志ニ隨從戮力イタシ居候段被聞  
食叡感恩召候今度歸國ノ儀申出候趣無據譯ニ  
付可任所意尙御用之節可抽忠節候右ハ藩主忠

誠之志有之儀且平常政事行届士風教諭宜敷故  
ト賴敷叡感恩食候事

藩士ニシテ褒書ヲ賜フハ實ニ異數ナリ而シテ  
君國ニ歸レハ幽閉セラル會々岡侯幕府ノ召ニ  
應シテ東行シ途大坂ヲ過ク近衛公ト青蓮宮ヨ  
リ薩長土三藩ノ士ヲ使トシ岡侯ヲ詰問スルノ  
トアリ其ノ東行ヲ止メ京ニ入ラシメ且ツ速カ  
ニ君ノ幽閉ヲ解キ上京セシム明年侯ノ國ニ歸  
ルヤ君隨フテ西下ス既ニシテ姉小路公暗殺ニ  
逢フノ事アリ君又同志數人ト上京ス會々時勢

一變七卿西下シ親兵解散ス君亦國ニ歸ル君曾  
テ日向延岡ノ僧胤康ト交ル胤康素ヨリ尊攘ヲ  
唱フ延岡藩之ヲ縛シテ京師ニ致ス君之ニ連坐  
シテ再タヒ檻ニ投セラル胤康ノ獄中ニ死スル  
ニ及ンテ君亦檻ヲ出ルヲ得テ家ニ屏居ス維  
新ノ際赦サレテ京ニ上ル朝命アリ徵士トナリ  
内國事務權判事ニ任シ尋テ大坂府ニ出仕シ參  
與ニ列シ堺役所設立スルノヲ司トリ遂ニ堺  
縣知事トナル君專ラ心ヲ堤防ニ用井又其俸ヲ  
捐テ窮困ヲ救フニ至リ民其澤ヲ被ル多シ庚午

ノ秋宮内大丞ニ轉ス明年ノ春嫌疑ニ罹リ鳥取  
藩ニ預ケラレ官位ヲ剝レタルニ幾クモナクシ  
テ其事白スルヲ得テ復タ用井ラレテ當今修  
史局ニ奉職ス余君ト交ルヲ久シ君ノ操行ヲ知  
ルヲ熟セリ所謂丹心憂國者ニシテ今年六十ヲ  
過キ豊饒衰ヘス志氣ノ凜然タルヲ始終一ノ如  
シ

服部元彰

清三郎ト稱シ南梁ト號ス南郭先生五世ノ孫也  
世々儒ヲ以テ業トス君ニ至リ舊尼崎藩櫻井遠



江守ニ仕テ大參事トナリ藩政大ニ修マル君經  
學ノ外詩文ヲ好ミ書法ニ精シ又巧ニ横笛ヲ吹  
ク君住スル所芝森本街ノ宅ハ南郭ノ舊地ニシ  
テ遺愛ノ樹石今尚ホ存セリ俗ニ此ノ地ヲ稱シ  
テ君子小路ト云名家ノ後往々不肖ノ子アリ家  
聲ヲ墮ス者少カラス服部氏ノ如キ五世ノ箕裘  
相繼テ斷ヘス遂ニ君子小路ノ稱アルニ至ル希  
世ノ美事ト謂ツヘシ

社主兼編輯長出版人

佐田白茅

社告 此書ハ今人ノ嘉言善行ヨリ一藝一技ニ  
至ル迄苟モ榮譽ヲ成スヘキ者ハ皆之ヲ採録ス  
四方ノ君子幸ニ其聞見スル所ヲ報知セヨ且書  
中事實ヲ失フアラハ隨テ其誤ヲ正スヘシ

本局

東京蠣殻町壹丁目貳番地

大來社

名譽新誌

第十二號



明治九年六月

二見一鷗小傳

栗本鋤雲小傳

瀧子女史小傳

印刷所

賣捌所

同

同

同

同藥研堀町三十八番地

報知社

大坂本町四丁目

河屋內真七

甲府八ヶ町

内藤傳右衛門

熊谷本町

博文堂

岩代國輪島

近江屋三十郎



小引

此編主トスル所人ノ美ヲ成シ人ノ善ヲ  
獎ムルニ在リ故ニ上廟堂ノ偉勳鴻烈ヨ  
リ下閭閻ノ寸善小技ニ至リ聞ニ隨ヒ之  
ヲ記ス若夫一代ノ得失ハ棺ヲ蓋フテ論  
定ル且ツ善ヲ善トシ惡ヲ惡トスルハ世  
自ラ史筆ノ在ル有リ此編ノ關カル所ニ  
非ス

名譽新誌第十二號

二見一鷗

君名ハ正則初メ檜林昌建ト稱シ又一鷗ト稱ス  
肥前島原ノ人ナリ醫ヲ以テ業トス君勤王ノ說  
ヲ唱ヘテ一藩ヲ鼓舞ス一藩應スル者少レナリ  
遂ニ國ヲ脫シテ京師ニ至リ東西ニ奔走シテ意  
氣太々銳ナリ幾クモナクシテ時勢一變七卿西  
下シ有志地ヲ拂フ君モ亦長州ニ走ル元治甲子  
ノ六月長藩國司信濃軍ヲ率井テ京ニ入ル君之  
ニ隨ヒ嵯峨天龍寺ニ屯ス七月十九日君斥候ト

シテ蛤御門ノ前ニ抵リ八條氏ニ應接シテ其邸  
中ヨリ築地ノ内ニ入り來島又兵衛ノ隊ヲ導キ  
會藩ノ陣ヲ攻撃ス而シテ長軍利アラス皆敗走  
ス君ハ泉州堺ノ人宮和田又左衛門ニ投シテ此  
ニ潜伏ス君ノ京師ニ在ルヤ愛昵スル所ノ小妻  
アリ祇園街ニ住ス幕吏之ヲ欺キ君ノ蹤跡ヲ詳  
ニスルヲ得タリ即チ堺ニ至リ君ヲ捕フ將サ  
ニ京師ノ獄ニ致サント欲シ浪華ヨリ舟ニ上リ  
夜淀江ヲ溯ル君ヲ縛シテ檣ニ繫ク君力アリ竊  
カニ腕ヲ搖カス縲纒漸ク緩ム時ニ舟橋本ノ邊

ニ到ル片月纔カニ山端ニ升リ波光朦朧タリ君  
捕卒ヲ欺キ尿セントチ請フ捕卒檣ニ繫ク所ノ  
繩ヲ解キ君ノ衣ヲ持シテ舷ニ倚ラシム君舷ヲ  
踏ミ尿スル者ノマテス忽チ南無阿彌陀佛ト叫  
ヒ身ヲ躍シテ水ニ沒ス水波亂レ濺キ滿舟ノ人  
盡ク驚ク而シテ君着ル所ノ衣ハ持シテ捕卒ノ  
手ニ在リ捕卒慌忙舟ヲ上下シテ君ヲ索ム曉ニ  
至リテ遂ニ獲ス即チ捨テ京ニ歸ル君素ヨリ水  
ニ慣ル其沒スルヤ水底ヲ潜行シテ川ヲ下ルヲ  
半丁許河岸ニ據リ浮萍ヲ被ムリ以テ捕舟ノ過

去ルヲ待テ徐カニ攀テ堤ニ上ル此時君裸體ニ  
シテ身ニ寸衣ヲ帶ヒス即チ竹杖ヲ携ヘ駕丁ニ  
扮シ行フ二里許リ一ノ村寺ヲ見ル之ニ投シテ  
事實ヲ告ケ以テ救助ヲ求ム僧惑ミテ君ヲ救フ  
君因テ長州ニ走ル丁ヲ得タリ維新ノ後集議院  
權判官トナリ當時教部省ニ出仕ス

栗本鋤雲

君匏菴ト號ス幕醫喜多村槐園ノ第三子ナリ出  
テ栗本氏ヲ嗣ク君夙ニ吐血ヲ患ヘ經年瘳ヘス  
父兄之ヲ憂ヘテ課スルニ勤學ヲ以テセス一ニ

其爲ス所ニ任ス故ニ君放縱自適規矩ノ外ニ超  
脫ス而シテ獨リ本草ヲ好ミ岩崎灌園ニ就テ之  
ヲ學ヒ多ク鳥獸草木ノ名ヲ識ル既ニシテ病漸  
ク痊ユ翻然歎シテ曰ク本草ハ醫學ノ一端ニ過  
キス醫ハ應ニ讀書ヨリ入ルヘキ也ト即チ安積  
良齋ノ門ニ遊ヒ又昌平黌ニ入り大ニ力ヲ讀書  
ニ用ユ後栗本氏ヲ襲フ栗本氏モ亦醫ヲ世々ニ  
シ祖父某好テ本草ヲ講ス故ニ君再ヒ本草ニ從  
事ス嘉永中和蘭贈ル所ノ蒸氣觀光丸始テ江戸  
ニ到ル幕府旗下ノ士ニ令シテ試乗セシム君奮

テ曰ク軍艦中豈ニ醫師ヲ欠クヘケン予孱弱ト  
 雖<sub>レ</sub>氏之ヲ爲サン乃<sub>レ</sub>官ニ請フテ允ヲ得タリ時  
 ニ幕醫言フ者アリ今ヤ洋籍ヲ讀ヲ禁スルノ日  
 ニ方リ洋船ニ試乗スルヲ請フ其事犯禁ニ類ス  
 ル者アリト是ニ於テ君病ヲ移シテ家居スル  
 半歳許事漸ク解ル<sub>レ</sub>ヲ得タリ而シテ前途頼ム  
 可キナシ因テ籍ヲ移シテ蝦夷ニ入り其地ノ醫  
 師ト相謀リ金ヲ贖シテ病院醫學所ヲ箱館ニ創  
 建ス居ル<sub>レ</sub>五年天下漸ク多事ナリ幕府始メテ  
 人ナキニ苦ム乃<sub>レ</sub>君ヲ擢テ箱館ノ組頭トス蓋

シ幕府醫ヲ轉シテ士ト爲ス者破格ニ屬ス享保  
 中人見氏ヲ以テ儒ト爲スノ事アリ二百六十年  
 間君ヲ併セテ僅ニ二人ノミ是ニ於テ君亦感奮  
 國ニ報スルノ志アリ幾モナクシテ幕命アリ江  
 戸ニ歸ル初メ日付トナリ後外國奉行ニ轉シ遂  
 ニ若年寄格ニ進ム佛國語學所ヲ開キ佛人ヲ雇  
 ヒテ横須賀製鉄所ヲ創メ佛國陸軍傳習教師ヲ  
 聘スル等皆君ノ建言ニ出ツ君ノ函館ニ在ルヤ  
 命ヲ受ケテ佛人メルトツトデカシユンニ日本語ヲ授ク  
 カシユン後ニ佛國公使レヲシロセスカ通辨官ト爲ル

因テ君最モ佛人ニ信重セラル君ノ特ニ佛人ヲ親ム者亦見ル所アリト云君命ヲ奉シテ佛國ニ使ス會々幕府顛覆ノ報到ル佛人或ハ勸ルニ申包胥ノ事ヲ以テス君家康ノ遺訓ヲ舉ケテ之ヲ謝ス既ニシテ歸ル則ハ人又勸ムルニ函館ニ奔ルヲ以テス君又從ハス曰ク既ニ一タヒ方嚮ヲ誤ル今日豈ニマダ再誤スヘケンヤト遂ニ城外ニ耕シ書ヲ著シ以テ自遣ル著ス所鉛筆紀聞曉窓追録アリ皆其洋行中ノ見聞スル所ヨリ出ツ而シテ其論スル所自カラ一種ノ見識アリ世ノ

新説ニ酔倒スル者ト迥然同シカラス維新ノ後新聞紙大ニ行ハレ社號ヲ掲クル者數十百種ニ下ラス各社競フテ名士ヲ聘ス君亦報知社ノ爲メニ其編輯ヲ管ス此時ニ當リ日報ニ福地源一郎アリ朝野ニ成島柳北アリ皆別ニ傳アリ三社鼎立旗鼓相當ル其論難一タヒ相激スルニ至テヤ雄辨風生シ快筆電飛ス疊篇累牘互ニ奇正ヲ鬪ハシ一勝一敗轉タ才學ヲ見ル然リ而シテ君筆墨ヲ娛ミ花月ヲ弄シ復タ用世ノ意ナシト云

瀧子女史

女史ハ舊弘前藩棟方氏ノ女ナリ幼ヨリ漢籍ヲ嗜ミ詩歌ヲ好ミ書ヲ能クシ又旁ヲ武技ニ達ス女史容姿美ニシテ身ヲ持スルヲ嚴ナリ年甫メテ十九弘前藩ノ參政毛内有右衛門ニ嫁シテ其繼室トナル天保ノ初メ藩ニ内訌アリ正奸二黨ニ分ル奸黨志ヲ得テ一時政ヲ擅ニス即チ津輕多膳毛内有右衛門等正黨ノ士數十名ヲ罪ス毛内氏ハ世祿三百石ナリ減シテ三十石トナシ之ヲ檻倉ニ幽ス有右衛門先妻ノ子三人又六七人ノ家累アリ女史仰テ舅姑ニ事ヘ俯シテ幼子ヲ

育シ朝ニ薪炊ヲ執リ夜ニ紡織ヲ勤メ其旁ヲ數子ニ教ユ家貧クシテ書ヲ買フヲ能ハス因テ學庸論孟等ノ書ヲ手寫シテ之ヲ授ク此時ニ當リ其舅狂疾ヲ發ス女史侍養數年敢テ怠ラス天保十年ニ至リ奸黨破レテ正黨再タヒ政ヲ執ルヲ得タリ此ニ至リテ毛内氏始テ舊ニ復ス嘉永中有右衛門歿ス女史節ヲ守リテ嫁セス此ヨリ家事ヲ先室ノ子平格ニ委テ女史ハ一亭ヲ作りテ之ニ居リ題シテ愛櫻亭ト曰ヒ花鳥ヲ詠シ雪月ヲ弄シ以テ自カラ娛ム今年七十二近シ篠田



雲鳳曾テ津輕ニ至ル女史之ト唱和シ相得テ歡甚シト云女史作ル所ノ歌數十首明治歌集ニ載ス故ニ今之ヲ贅セス

社主兼編輯長出版人

佐田白茅

社告 此書ハ今人ノ嘉言善行ヨリ一藝一技ニ至ル迄苟モ榮譽ヲ成スヘキ者ハ皆之ヲ採録ス四方ノ君子幸ニ其聞見スル所ヲ報知セヨ且書中事實ヲ失フアラハ隨テ其誤ヲ正スヘシ

本局

東京蠣殻町壹丁目貳番地  
大來社

名譽新誌

第十三號



明治九年六月

中山忠能公小傳

佐藤舜海小傳

石川和介小傳

佐瀨得所小傳

印刷所

賣捌所

同

同

同

同藥研堀町三十八番地  
報知社

大坂本町四丁目  
河内屋真七

甲府八ヶ町  
内藤傳右衛門

熊谷本町  
博文堂

岩代國輪島  
近江屋三十郎



小引

此編主トスル所人ノ美ヲ成シ人ノ善ヲ  
獎ムルニ在リ故ニ上廟堂ノ偉勳鴻烈ヨ  
リ下閭閻ノ寸善小技ニ至リ聞ニ隨ヒ之  
ヲ記ス若夫一代ノ得失ハ棺ヲ蓋フテ論  
定ル且ツ善ヲ善トシ惡ヲ惡トスルハ世  
自ラ史筆ノ在ル有リ此編ノ關カル所ニ  
非ス

名譽新誌第十三號

中山忠能公

公ハ國母慶子二位局ノ父ニシテ天資誠實温厚  
常ニ祖父愛親公ノ遺志ヲ繼承センヲ思フト  
云安政五年佐倉侍從開港互市ノ勅許ヲ請フ朝  
議紛々未タ決セス時ニ關白某氏關東へ答フル  
ノ草案ヲ諸卿ニ示サレ文中外交ノ事ハ都テ幕  
府へ委任スヘキノ語アリ公慷慨シテ曰ク果シ  
テ此ノ勅案ノ如キ天朝ナキニ若カス此ヲ以テ  
幕府ニ報セハ上ハ神慮叡慮ニ悖リ下ハ蒼生萬

民ノ心ニ背ク吾決シテ此案ニ服セス諸卿翕然  
公ノ説ヲ是トシ楮紳八十八人連署シテ建白ス  
是ニ於テ報案ヲ改メ諸藩群議ノ後再ヒ奏聞ニ  
及フヘキノ勅報アリ幕府震悚シテ朝威大ニ振  
フ尋テ公議奏トナリ屢攘夷ノ事ヲ以テ幕府ヲ  
督ス幕府從ハス公深ク之ヲ憂ヒ竊カニ其家人  
田中河内介ニ命シ攝西ノ有志ヲ鼓舞セシム河  
内介中國九州ヲ經歷シ遂ニ薩州ニ入り島津氏  
上京ノ議ヲ決セシム既ニシテ島津久光君京師  
ニ至ル公之ト謀リ徳川將軍及ヒ諸藩ヲシテ上

京セシメ皇威益振フ後々時勢數變シテ公亦議  
奏ヲ辭ス岩倉具視君事ニ坐シテ岩倉ノ山中ニ  
屏居ス竊カニ西州ノ諸藩ト通シ恢復ノ事ヲ謀  
ル公及ヒ正親町三條氏俱ニ其謀ニ與リ内勅ヲ  
諸藩ニ傳フ是ニ於テ中興ノ業成レリ戊辰十二  
月九日議定ニ任ス明治元年從一位准大臣ニ補  
セラレ二年神祇伯ニ任ス同年勅シテ曰ク皇道  
萎靡滿朝危疑ノ日ニ當リ斷然回復ノ策ヲ贊シ  
竟ニ中興ノ大業ヲ輔ケ候段叡感不斜仍賞其勳  
勞祿千五百石下賜候事四年又勅シテ曰ク追々

老年苦勞ニ被思召本官ヲ免シ特旨ヲ以テ終身  
現米五百石下賜候事此ヨリ公優遊老ヲ養フ

附傳 中山忠光公

公ハ忠能卿ノ二男ニシテ剛銳果敢常ニ國事ヲ  
慷慨ス癸亥ノ春徳川將軍上京スト雖モ攘夷ノ  
勅ヲ奉スルノ意ナシ公憤激ニ堪ヘス別ニ義舉  
ヲ爲サント欲シ位記ヲ返上シ姓名ヲ改メ毛利  
眞齊ト稱シ長州ニ下リ有志ヲ鼓舞シ又横濱ニ  
抵リ外情ヲ察シテ京ニ歸ル時ニ大和行幸ノ説  
盛ニ起ル其實ハ兵ヲ移シテ關東ヲ討ンテ謀

ルナリ藤本鉄石松本奎堂吉村寅太郎等公ヲ奉  
シテ兵ヲ大知ニ舉ケ以テ行幸ノ先驅ヲ爲セリ  
而シテ時勢俄カニ變シ有志地ヲ拂ヒ復寸兵ノ  
公ヲ援クル者ナシ而シテ幕府紀津彦ノ諸藩ニ  
命シテ公ヲ攻メシム公ノ軍遂ニ敗レ松本藤本  
ノ諸人皆戰死ス公自カラ奮戰シテ重圍ヲ脱シ  
遂ニ長州ニ走ル公ニ從フ者半田門吉輩數人ノ  
ミ甲子幕兵來リテ長ヲ擊ツ長人公ヲ忌ム者ア  
リ害ニ遇フテ歿ス時ニ年二十二人皆之ヲ傷ム

佐藤舜海

君名ハ尙中本姓ハ山口ナリ下總小貝川ノ人初  
メ寺門靜軒ニ從ヒ漢學ヲ修メ後佐藤泰然ニ就  
テ西洋學并ニ醫術ヲ學フ君天資外科截斷ニ長  
ス泰然之ヲ愛シ遂ニ養フテ子トナス萬延二年  
長崎ニ遊ヒ洋醫朋百氏ニ就テ内外諸科ヲ修ム  
而シテ外科術ニ於テハ朋百自カラ以テ及ハス  
トス居ルヲ一年ニシテ藩ニ歸リ其業益々進ム  
幕府屢召セトモ起タス學ノ未開ヲ歎シ之ヲ闡  
明スルヲ以テ自ラ任ス乃チ私立病院ヲ建テ生  
徒ヲ延テ之ヲ教育ス方今有志ノ土岩佐相良佐

々木ノ諸人皆其門ニ出ツ而シテ病客ノ來リテ  
診ヲ乞フ者常ニ踵ヲ接ス君又曾テ佐倉藩ニ建  
議シ病院ヲ設立セシム此本邦病院ノ嚆矢ナリ  
明治二年徵命アリ文部大丞兼大典醫ニ任シ大  
學東校ノ學務ヲ管セシム君之ヲ擔當シ施設ス  
ル所多シ醫學一變シテ今日ノ隆盛ニ至ルハ君  
ノ力ナリ三年君建言スル所アリ府下病院ヲ設  
ケラル又衛生ノ事ニ於テ屢獻言スルアリ七年  
君職ヲ辭シ順天堂病院ヲ建築ス病室數十宏大  
清麗官立ノ病院ニ遜ラス君男アリ進ト稱ス進

獨乙ニ留學シ澳私太利亞ニ遊フ丁六年醫學大ニ成ル上年六月歸朝ス是ニ於テ父子協心同力大ニ治術ヲ施シ普ク世人ヲ救ハント欲ス世ノ沈痾ヲ抱キ危患ニ罹ル者争テ其病院ニ投シ眇視跛履シテ歸ル者月ニ數百人ナリ進ノ獨乙學校ニ在ルヤ策問甲科最上級ニ上リトフトルノ許可狀ヲ得テ歸ルトフトルハ博士ナリ方今洋行生徒多シト雖モ博士ノ名譽ヲ得シ者ハ未タ之ヲ聞カス鳳毛ノ美尤モ稱スヘシ

石川和介

君ハ備後福山ノ人ナリ賴山陽ニ學ヒテ其愛弟タリ山陽ノ歿スルヤ君其後事ヲ經理セス藩主阿部氏君ヲ舉テ儒官トス後閣老タルニ及テ引テ機密ニ參シ裨益スル所多シト云水戸烈公ノ幽閉セララルヤ幕府要路ノ家人往々時ニ阿リテ烈公ヲ排撃ス而シテ君獨リ之ヲ憂ヘ屢伊勢守ニ言テ尽力セリ烈公ノ譴ヲ解クヤ君ヲ招テ厚ク贈ル君辭シテ曰ク臣天下ノ爲メニ明公ヲ出サントス私ヲ謀ルニ非ス今賜ヲ拜セハ私恩ヲ賣ルニ將シト之ヲ返シテ受ケス公益其操守ア

ルニ感ス君人トナリ短小恂々トシテ言フ能ハ  
サルカ如シ其ノ人ニ接スルヤ謙遜ニシテ傲ラ  
ス和氣藹如タリ闔藩ノ士民皆之ニ依頼ス而シ  
テ君ノ爲ス所着々實効アリ維新ノ際長州ノ兵  
福山城ヲ討ツ時ニ藩主没シテ未タ葬ラス人心  
洶々タリ君矢石ヲ犯シテ長人ニ應接ス長兵爲  
メニ圍ヲ解テ去リ一藩塗炭ノ苦ヲ免ル君ノ力  
ナリ舊知事阿部氏君ヲ思テ置カス君ヲ招テ東  
京丸山邸ニ住セシメ共ニ家事ヲ謀ル今年七十  
餘風ヲ病テ臥ス

佐瀬得所

君元會津ノ藩士ナリ風貌昂然トシテ清淡水ノ  
如シ常ニ道松雪ノ書ヲ好ミ筆ヲ挾ミテ天下ニ  
漫游ス曾テ長崎ニ到リテ清客錢少虎江元曦ヲ  
訪ヒ共ニ筆法ヲ論ス此ヨリ其業益進メリ明治  
元年復タ上海ニ航シテ周錫瓚等諸人ニ接ス居  
ルト一年ニシテ歸リ聲名愈揚リ弟子益進ム而シ  
テ君更ニ誇色ナク好シテ人ニ下ル故ニ人亦君  
ヲ愛敬ス同五年脩齊廉節ノ四大字ヲ書シテ天  
覽ニ供ス後宮内省ニ召サレ特ニ描金梅花名筆



一枝畫金竜香墨兩笏ヲ賜フ寶ニ御物ナリ今茲  
五月大ニ雅筵ヲ兩國橋東ノ中村樓ニ張テ天賜  
ノ筆墨ヲ縱觀セシメ復タ鶴ト龍トノ二大字ヲ  
書スルニ老腕輕掃シテ潑墨淋漓タリ九尺四方  
ノ紙二枚ヲ綴リ各一字ヲ書スト云是日貴賤觀  
者堵ノ如ク廣樓ニ立錐ノ地ナシ其殷盛ナル近  
來雅會ノ希ナル所ナリ

社主兼編輯長出版人

佐田白茅

社告 此書ハ今人ノ嘉言善行ヨリ一藝一技ニ  
至ル迄苟モ榮譽ヲ成スヘキ者ハ皆之ヲ採録ス  
四方ノ君子幸ニ其聞見スル所ヲ報知セヨ且書  
中事實ヲ失フアラハ隨テ其誤ヲ正スヘシ

東京蠣殼町壹丁目貳番地

本局

大來社

正誤

小河一敏傳中其ノ東行ヲ止メ京ニ入ラシメ且  
ツの十五字を岡侯東行スルコトヲ止メ京ニ入  
りの十五字に改む

名譽新誌

第十四號



明治九年六月

岩倉具視公小傳  
安田老山小傳



印刷所

賣捌所

同

同

同

同藥研堀町三十八番地  
報知社

大坂本町四丁目

河内屋真七

甲府八ヶ町

内藤傳右衛門

熊谷本町

博文堂

岩代國福島通リ十丁目

近江屋周吉



小引

此編主トスル所人ノ美ヲ成シ人ノ善ヲ  
獎ムルニ在リ故ニ上廟堂ノ偉勳鴻烈ヨ  
リ下閭閻ノ寸善小技ニ至リ聞ニ隨ヒ之  
ヲ記ス若夫一代ノ得失ハ棺ヲ蓋フテ論  
定ル且ツ善ヲ善トシ惡ヲ惡トスルハ世  
自ラ史筆ノ在ル有リ此編ノ關カル所ニ  
非ス

名譽新誌第十四號

岩倉具視公

公天資英敏言語爽快摺紳中希レニ見ル所ナリ  
公弱冠ノ時嘗テ侍從タリ時ニ主上供奉甚タ薄  
シ一日御詠アリ筆硯ヲ命シ玉フ而シテ左右短  
冊ヲ供スルヲ能ハス公慨歎ニ堪ヘス涙ヲ把リ  
テ退ク既ニシテ夜ニ入り竊カニ所司代某ノ門  
ヲ叩キ名刺ヲ通ス某大ニ怪ミ公ヲ延キテ來ル  
所以ヲ問フ公左右ヲ屏ソケ具サニ供奉欠乏ノ  
狀ヲ述ヘ且ツ慷慨シテ曰ク堂々タル萬乘ノ至

尊區々ノ紙筆ニ窮スルニ至ル是豈ニ洪歎ニ堪  
ンヤ足下幕府ニ仕フト雖モ元是王臣ノミ若シ  
君臣ノ大義ヲ辨セハ宜シク之ヲ幕府ニ謀リ以  
テ左右ノ欠乏ヲ補フヘシ某之ヲ聞キ大ニ感動  
シテ曰ク之ヲ幕府ニ上申ス事太々容易ナラス  
若カシ某カ私金ヲ献シ聊カ萬一ヲ裨補セント  
遂ニ金若干ヲ奉ス此時ニ當リ幕府ノ威權甚々  
猛ナリ公ノ慨奮身ヲ顧ミサルニ非ンハ安ソ能  
ク某ヲ感動スルヲ得ンヤ某亦此ヨリ頗ル尊  
王ノ志ヲ起シ遂ニ幕府ノ嫌忌ニ觸ルト云  
私金ノ

献チスルヤ以テ名譽ト爲スニ足レリ憾ラクハ  
其姓名ヲ逸ス他日再記以テ之ヲ詳ニスヘシ  
安政戊午ノ春閣老佐倉侯上京シテ互市開港ノ  
勅許ヲ請フ中山大納言等ノ樞紳八十八人連署  
シテ之ヲ沮ム公モ亦之ニ與ル此ヨリ朝幕ノ間  
相協和セス動モスレハ紛紜ヲ生ス是ニ於テ公  
武合体ノ説起リ幕府頻リニ和宮ノ降嫁ヲ請フ  
曰ク公武合体而シテ後ニ膺懲ノ功奏スヘシト  
公合体ノ説ヲ聞キテ之ヲ是トシ頗ル之ヲ主張  
ス既ニシテ和宮東下シテ鎮港ノ功擧ラス攘夷  
ヲ主張スル者争フテ之ヲ攻ム朝廷亦其議ヲ納

レ楯紳數人ヲ譴責ス公モ亦之ニ坐シテ禁錮セ  
ラル尋テ又洛外退隱落飾ノ命アリ公薙髮シテ  
友山又對岳ト號シ洛北岩倉村ニ屏居ス公屏居  
ニ在リト雖モ其心未タ嘗テ皇室ヲ忘レス密カ  
ニ皇綱ヲ挽回センコトヲ謀ル然リ而シテ公曩キ  
ニ公武合体ノ說ニ左袒セルヲ以テ勤王ノ士皆  
佐幕ヲ以テ公ヲ目シ敢テ近ツキ親ム者ナシ大  
橋慎三香川敬三ハ素ヨリ正議ノ士ナリ偶々公  
ヲ見テ其英敏凡ナラサルニ感シ且ツ其恢復ノ  
志ヲ抱クヲ知り遂ニ心肝ヲ披キテ之ヲ贊成シ

密カニ公ノ爲メニ奔走シ西郷大久保木戸後藤  
坂本龍馬石川誠之助ノ諸士ト謀ヲ通ス公又玉  
松操ヲ招キテ共ニ大計ヲ議ス操ハ比叡山ノ麓  
ニ隱居シ卓犖奇偉ノ士ナリ北島秀朝曩キニ公  
ト謀ル所アリ而シテ故アリ往テ蝦夷ニ遊フ此  
時來リ會シ操等ト共ニ密議ニ關ス玉松氏ノ事  
北島氏ノ傳  
ニ詳リ楯紳ニハ中山正親町三條中御門ノ三君ア  
リ公ト謀ヲ合セテ密カニ恢復ノ議ヲ奏シ内勅  
ヲ諸藩ノ志士ニ下ス三君ハ朝ニ在リテ宮中ヲ  
周旋シ公ハ野ニ在リテ諸藩勤王ノ士ヲ倡フ是

ニ於テ復古ノ業已ニ胚胎ス而シテ内外ノ幕吏  
一人ノ之ヲ知ル者ナシ慶應三年十月徳川將軍  
時勢ニ迫リ政權ヲ奉還ス是ニ於テ朝廷攝政關  
白及ヒ幕府ヲ廢シ新タニ總裁議定參與ヲ置ク  
是皆公ノ豫メ規畫セシ處ニ出ツト云是時公勅  
勘ヲ赦サレ復飾シテ參與ニ拜ス三條實美君筑  
前太宰府ニ在リ此ニ至リ勅シテ之ヲ召シ公ト  
共ニ議定副總裁ニ任ス明治元年四月議定兼輔  
相トナル二年正月輔相ヲ辭シ仍ホ議定タリ七  
月大納言トナル九月永世祿五千石ヲ賜フ詔シ

テ曰ク

汝具視皇道ノ衰ヲ憂ヒ大ニ恢復ノ志ヲ抱ク竟  
ニ太政復古ノ基業ヲ輔ケ躬ヲ以テ天下ノ重ニ  
任シ夙夜勵精規畫圖治以テ中興ノ業ヲ成ス洵  
ニ國ノ柱石朕カ股肱朕切ニ厥偉勳ヲ嘉ミス乃  
テ賞賜シテ厥勞ニ酬ユ嗚呼將來輔導益望ム  
アリ汝具視其懋哉  
三年十二月勅使トシテ鹿兒島山口ノ二藩ニ往  
キ島津氏毛利氏ニ諭シテ上京セシム四年七月  
外務卿ニ任ス八月主上親カラ公邸ニ臨ミ勅語

ヲ賜フ

一新以來日夜勵精圖治今日ノ盛業ニ到ルモ汝具視功居多ナリ依テ親臨シ以テ其功勞ヲ謝ス十月右大臣ニ轉シ又特命全權大使トナリ歐米各國ニ使ス到ル處其國主ヲ見其官吏ニ接シ其風俗ヲ視其政体ヲ察シ之ヲ斟酌シ以テ施設スル所アツントス木戸大久保及ヒ伊藤博文山口尚芳副使トシテ公ニ隨フ其行程米ニ始マリテ歐ニ終ル以下  
次号

安田老山

君今東京ニ住シ畫名方ニ高シ曾テ支那ニ遊ヒ彼土ノ名家ニ就テ學フ居ルヲ十年計リ四五年前歸朝セリ近コロ清人昭文蔣カ著ス所ノ墨林今話ヲ獲テ之ヲ讀ム其續編中君ノ小傳ヲ掲ケ叙述ス頗ル詳ナリ因テ其全文ヲ記載ス吾ノ畫名早ク已ニ海外ニ滿ツ盛ナリト謂ツヘシ今話ノ日本人ヲ載スル君及ヒ木下逸雲ト二人アルノミ

日本國濃州萬里翁、姓安田名養字老山、素有乘風破浪志、故號萬里翁云、父名泰元字默翁、以醫名、世

善<sub>ス</sub>擘<sub>ニ</sub>窠<sub>ニ</sub>書<sub>ヲ</sub>、嘗<sub>ス</sub>書<sub>ス</sub>一親字、翁裝潢成軸、珍如拱壁、懸於座右、以認不忘、承父業、醫、遇寒素者、併給藥資、且秉性豪爽、嗜酒好吟詠、善書畫、以下海外山水、未拓眼界、携妻航海、入中華、歷兩浙、遇佳山水、輒低徊、不能去、故畫境日進、直入宋元人堂奧、游蹤所至、投繚素者踵相接焉、妻伊原氏、名愛、字停車、紅楓其別號也、以能畫名、筆墨與翁略相埒、尤通聲律、家置一弦琴、能辨五音、蓋其風雅相唱和、雖古之蘇蕙、竇滔、不是過也、夫山水靈秀之氣、毓於男、復鐘於女、生於海外、而著名於中國、如萬里翁夫婦者、可謂遐服中翹楚矣、

爰錄遊西湖一律云、十里煙雲望欲迷、柳湖春富鳥城西、白鷗點破青銅鏡、紫燕翻殘紅粉泥、兩岸霞光橫別浦、大橋虹影臥前溪、桃花不語留幽客、惹出詩情到處題、

附錄 木下逸雲

君畫ヲ以テ一時ニ鳴リ鐵翁ト其名ヲ齊クス先年東京ニ遊ハント欲シ途ヲ海上ニ取ル偶颺ニ逢フテ歿ス何ソ哀ムニ堪ンヤ今其小傳ヲ墨林今話中ニ得タリ因テ又之ヲ記載ス  
日本國長崎木下相宰、字公宰、號逸雲、書畫俱法董



思翁、蘭竹石小品亦清逸有致、其絹素厚而密、似不  
用膠、攀者兼長筆札、其言云、長崎每歲春秋兩度設  
書畫雅集之筵、四方名士咸會、有不至者、亦作書畫  
彙投、彼國翰墨之盛可想見矣、圖章曰荷香深處是  
吾居、又曰水宰、又有隆衡、號秋塘善人物山水、宗十  
洲法亦工整不俗、

正誤

第十三号中山公傳中戊辰十二月ハ丁卯十二月ノ誤リ  
佐藤舜海傳中有志ノ士ハ有名ノ士ノ誤ナリ

社主兼編輯長出版人

佐田白茅

社告 此書ハ今人ノ嘉言善行ヨリ一藝一技ニ  
至ル迄苟モ榮譽ヲ成スヘキ者ハ皆之ヲ採録ス  
四方ノ君子幸ニ其聞見スル所ヲ報知セヨ且書  
中事實ヲ失フアラハ隨テ其誤ヲ正スヘシ

本局

東京蠣殼町壹丁目貳番地

大來社

印刷  
賣捌所

同藥研堀町三十八番地

報知社

賣捌所

大坂本町四丁目

河内屋真七

同

甲府八ヶ町

内藤傳右衛門

同

熊谷本町

博文堂

同

岩代國福島通り十丁目

近江屋周吉

三錢五厘

明治九年七月

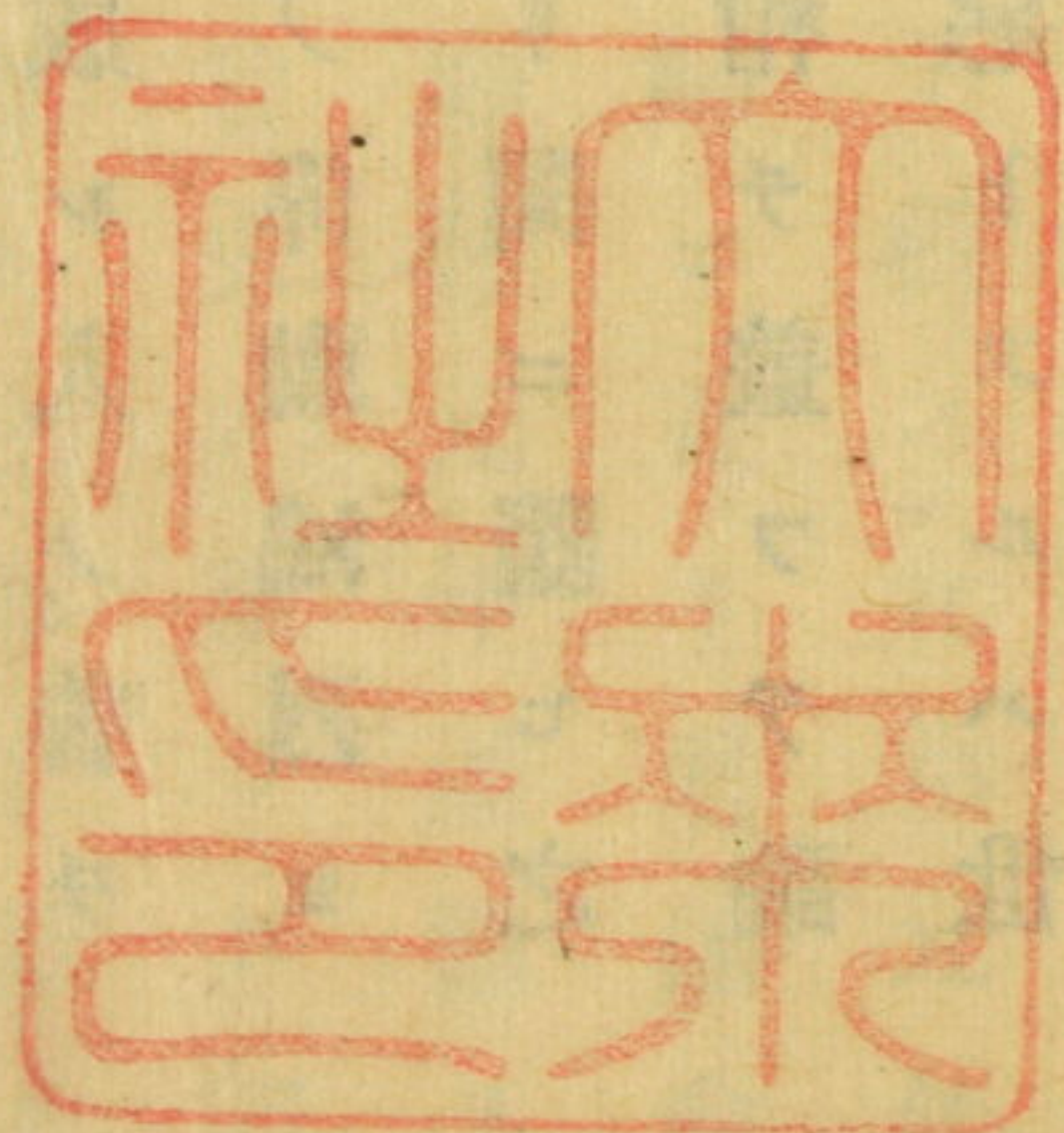
北島秀朝小傳

別府庄助小傳

跡見花蹊女史小傳

名譽新誌

第十五號



小引

此編主トスル所人ノ美ヲ成シ人ノ善ヲ  
獎ムルニ在リ故ニ上廟堂ノ偉勳鴻烈ヨ  
リ下閭閻ノ寸善小技ニ至リ聞ニ隨ヒ之  
ヲ記ス若夫一代ノ得失ハ棺ヲ蓋フテ論  
定ル且ツ善ヲ善トシ惡ヲ惡トスルハ世  
自ラ史筆ノ在ル有リ此編ノ關カル所ニ  
非ス

名譽新誌第十五號

北島秀朝小傳

君下野國那須郡武茂ノ郷ニ住シ土地若干ヲ有  
シ世々水戸侯ニ仕フ父ヲ智貞ト曰フ君ハ其二  
男ナリ幼名ヲ千太郎又時之助ト稱ス元治元年  
一橋慶喜公幕府後見トシテ京師ニ在リ君藩命  
ヲ受ケ其附屬トナリテ上京ス慶應元年藩籍ヲ  
辭シ專ラ尊攘ニ從事ス時ニ機會未タ至ラス因  
テ蝦夷地開拓ノ業ヲ興サント欲シ三年丁卯ノ  
四月函館ニ至リ此ヨリ蝦夷地ニ入り經過スル

一數月偶京師ノ報信ヲ得タリ二三有志ノ公卿  
竊カニ薩長土ノ諸藩ニ結ヒ大政挽回ノ機近キ  
ニ在リト是ニ於テ晝夜兼行直々ニ京師ニ至ル  
時ニ三年十月ナリ是ヨリ先ニ前中將岩倉具視  
公ヲ屏居中ニ訪ヒ共ニ算策スル所アリ此ニ至  
リ公及ヒ玉松操等ニ會ス操ハ樞紳山本氏ノ庶  
流ニシテ和漢ノ學ニ通シテ大有爲ノ材ヲ抱キ  
草廬ヲ叡岳ノ東麓ニ結ヒ其行奇偉超凡土人稱  
シテ仙人ト云フ岩倉公素ヨリ其材德ヲ知り深  
ク之ニ交ル此時岩公二三ノ公卿ト恢復ノ大計

ヲ運ラシ豫メ政体更革ノ事ヲ議セント欲シ乃  
チ之ヲ操ニ謀ル操慨然トシテ之ニ應シ古今ノ  
成敗ヲ論シ利害得失ノ在ル所ヲ詳ニシ以テ更  
革ノ議數條ヲ草ス其大要以謂ラク維新ノ業タ  
ルヤ宜シク神武ノ創業ニ倣フベシ又門閥ヲ廢  
シ汎ク人才ヲ徵スベシ又謂フ大臣公卿涅齒粉  
面ノ弊習ヲ廢スヘシ又謂先ツ職制ヲ簡ニシ漸  
ク章程ヲ密ニスヘシ又謂フ關白以下ノ職名ヲ  
廢シ更ニ總裁議定參與ノ三職ヲ置クヘシ此時  
君二三ノ同志ト共ニ其密議ヲ聞キテ其文案ヲ

記ス岩公操ノ卓見ヲ賞ス維新ノ日ニ至リ其議  
スル所尽ク用井ラレ操ハ其功ヲ以テ華族ニ列  
ス明治元年正月岩倉公子具定東山道鎮撫總督  
トシテ京師ヲ發ス君之ニ隨ヒ大津驛ニ於テ大  
監察ニ拜ス此時江濃二國ノ間ニ浮浪無賴ノ徒  
出沒シ民物ヲ掠ムル者少カラス衆民之カ爲メ  
ニ業ヲ安セス督府ノ馬前ニ至リ歎訴スル者陸  
續トシテ止マズ總督深ク之ヲ憂ヒ君ニ命シテ  
之ヲ鎮撫セシム君東奔西走シテ暴徒ヲ誡メ良  
民ヲシテ安堵セシム時ニ總督濃州大垣ニ進ミ

留ルヲ數旬ナリ君復命ス三月總督進テ武州浦  
和驛ニ至ル此時幕府ノ政令既ニ止ミ關東八州  
徳川氏ノ郡吏等賊徒ノ爲メニ犯サレ之ヲ防禦  
スルノ力ナク住所ヲ去テ江戸ニ歸ル者アリ或  
ハ難ヲ避ケテ脫スルアリ又賊兵ニ加ハルアリ  
爰ニ至テ治民ノ政全ク絶エ此間ニ乘シ浮浪無  
賴ノ徒愚民ヲ煽動シ武藏上野ノ間ニ暴行シテ  
豪農富家ヲ劫シ公然財ヲ奪ヒ甚シキハ火ヲ放  
テ家ヲ燒キ其災害ニ罹ル者數十百戸慘苦ノ狀  
言フニ堪ヘス是ニ於テ鴻ノ巢驛近傍ノ民爭フ

テ督府ニ來リ暴徒掃攘ノ事ヲ請フ總督又君ニ命シ一小隊ヲ率井テ之ヲ鎮撫セシム君暴徒數人ヲ戮シ愚民ノ煽動セラル者ヲ誠諭シ數日ニシテ復命ス時ニ督府ノ兵進テ下野ニ入り頗ル苦戦ス而シテ奥羽ノ諸藩多ク賊軍ヲ援ケ賊兵滋々起リ本營ノ兵殆ント將サニ尽ントス是ニ於テ君督府ノ命ヲ奉シ上京シテ東國ノ形勢ヲ陳述シ朝廷更ニ大軍ヲ發シ速ニ東北ノ賊ヲ平ケラレシトテ奏請ス跡ハ次号ニ讓ル

別府庄助小傳

君ハ置賜縣高玉村ノ人ナリ家農ニシテ世々村長タリ身長六尺膂力人ヲ兼ヌ嘗テ力者谷風ト角抵シテ互ニ屈セス又少フシテ任俠ヲ好ミ衆ト賭博ス此時賄博ノ刑半髮ヲ剃ルヲ律トス吏保庇シテ之ヲ剃ルマテ妻曰ク幸ナリ良人ノ刑ヲ免ルヤ君鏡ヲ照テ曰ク法ノ如クナラサルヘカラスト自ラ之ヲ剃ル是ヨリ節ヲ折リ農事ニ黽勉シ又夜竊カニ書ヲ讀メリ君ノ村長タルヤ小民ヲ誘導シ農桑ニ從事セシメ又鰥寡孤獨ヲ賑恤スル勝テ數フヘカラス舊藩主數々其功

續ヲ賞セリ君隱居セシヨリ深ク舊藩主鷹山公  
ノ令徳ヲ慕ヒ一堂ヲ建立シ之ヲ養蠶神ト名ケ  
春秋兩度之ヲ祭祀ス維新ノ後謙信鷹山二公ヲ  
縣社ニ列セララル、ニ及テ君建立スル所ノ社ハ  
村内ノ大祭ト成リ男女群集來拜ス朝廷方ニ小  
學校設立ノ命アリ村中學問ノ何物タルヲ知ラ  
ス頗ル困難ヲ唱フ君自ヲ主トナリ百餘金ヲ出  
シ高玉田尻兩村ヲ合併シ新タニ一校ヲ建築シ  
又自ヲ子弟ヲ誘掖鼓舞シテ悉ク學ニ就カシム  
明治七年土地再反別アリ諸出費殆ント一年ノ

税ニ比ス小民鷺々タリ君朝意ノアル所ヲ懇々  
説諭セリ又村中ニ滯税數百金アリ人皆之ヲ辨  
スル能ハス來テ君ニ倚頼ス君他村ヨリ二朱ノ  
利ヲ以テ之ヲ借り一朱ノ利ヲ以テ之ヲ貸ス或  
人之ヲ問フ答テ曰ク我家村長タレハ之ヲ償ハ  
サルヲ得ス村中ノ爲メニ一割ノ損失我ニ於テ  
幸多シト又近年蠶種ノ價低下シテ售レス君ノ  
親族破産ニ至ル者四戸アリ君家具ヲ沽却シテ  
之ヲ濟恤ス君年八十夙ニ起キ夜ニ寢テ凍雪ノ  
朝夕雪舟ヲ引キ遠ク肥糞ヲ田圃ニ搬運シ未タ

嘗テ倦色アラス君平生ノ談苟モ鷹山公ニ及ヘ  
ハ感泣シテ其徳ヲ稱スト云

花蹊女史小傳

女史姓ハ跡見名ハ瀧野其父重敬ハ攝津西成郡  
ノ人ナリ女史性明慧四歳ニシテ兒戲ヲ好マス  
獨リ書畫ヲ好ノリ重敬之ヲ奇トシ師ヲ擇ンデ  
書畫文事ヲ學ハシム女史京師ニ在ルヲ數年ナ  
リ女史ノ姉某姉公路公ノ家ニ事フ公素ヨリ正  
議ヲ以テ鳴ル女史モ亦娥眉ヲ軒起シテ時務ヲ  
論シ慷慨ノ名一時ニ著ル維新ノ後大ニ悟ル所

アリ悉ク圭角ヲ磨シ專ラ風流文學ニ從事ス明  
治五年ノ春始メテ東京ニ來リ生徒ノ書畫ヲ學  
フ者日ニ集ル八年ノ冬ニ至リ更ニ女學校ヲ設  
ケ大ニ生徒ヲ延テ之ヲ教ユ生徒數十百人華族  
摺紳其半ニ過キ洋人モ入校スル者アリト云其  
教ユル所ハ和漢ノ典籍及ヒ書畫算數裁縫ナリ  
而シテ其生徒タル者起居法アリ容儀則アリ貞  
靜温和ヲ以テ主トシ閨秀彬々然トシテ出ツ朝  
鮮修信使ノ來ルヤ其正使金倉山等ト外務大丞  
宮本ノ宅ニ相遇フ女史一絶ヲ賦シテ之ニ贈ル



扶桑深綠映鷄林喜見高人航海臨形管縱令乏  
詞藻可無新句表微忱

正使倉山韻ヲ次テ之ニ酬ユ韓使ノ唱和ハ古ヨ  
リ少カラス然レ女史ニシテ詞藻ヲ韓客ト闘ハ  
ス者ハ君ヲ以テ始トス吾頃者中猿樂町ヲ過キ  
一ノ學校ヲ見ル之ヲ構スルニ層樓ヲ以テシ之  
ヲ周ラスニ玻璃ヲ以テシ玲々瓏々表裡ヲ洞見  
スヘシ而シテ金釵影搖キ書聲琅然タリ初メ官  
立ノ女學校ナルヲ疑フ而シテ之ヲ問ヘハ女史  
ノ私立ニ係ルト云嗚呼盛ナリ

社主兼編輯長出版人 佐田白茅

社告 此書ハ今人ノ嘉言善行ヨリ一藝一技ニ  
至ル迄苟モ榮譽ヲ成スヘキ者ハ皆之ヲ採録ス  
四方ノ君子幸ニ其聞見スル所ヲ報知セヨ且書  
中事實ヲ失フアラハ隨テ其誤ヲ正スヘシ

本局

東京蠣殼町壹丁目貳番地 大來社

印刷  
賣捌所

賣捌所

同藥研堀町三十八番地  
報知社

大坂本町四丁目  
河内屋真七

甲府八ヶ町  
内藤傳右衛門

熊谷本町  
博文堂

岩代國福島通り十丁目  
近江屋周吉

同

三錢五厘

明治九年七月

北島秀朝小傳ノ續キ

薄井龍之小傳

關雪江小傳

附錄 絲笄女史小傳



# 名譽新誌

第十六號

小引

此編主トスル所人ノ美ヲ成シ人ノ善ヲ  
獎ムルニ在リ故ニ上廟堂ノ偉勳鴻烈ヨ  
リ下閭閻ノ寸善小技ニ至リ聞ニ隨ヒ之  
ヲ記ス若夫一代ノ得失ハ棺ヲ蓋フテ論  
定ル且ツ善ヲ善トシ惡ヲ惡トスルハ世  
自ラ史筆ノ在ル有リ此編ノ關カル所ニ  
非ス

名譽新誌第十六號

北島秀朝小傳ノ續キ

元年五月君京師ヨリ江戸ニ返ル時ニ江戸ハ鎮  
臺ヲ置キ三條大納言之カ將タリ然レ專ラ民政  
ヲ掌ル者ナク白晝強盜公行百萬ノ生民將サニ  
塗炭ニ陷ントシ號泣ノ聲噪然トシテ市ニ滿ツ  
五月君鎮臺府判事ニ任セラレ江藤新平土方久  
元等ト共ニ兩町奉行所ヲ改メテ市政裁判所ヲ  
置ク此時初テ府内ニ羅兵ヲ設ケ盜賊ヲ捕獲シ  
訟ヲ聽キ獄ヲ斷シ以テ漸ク人民保護ノ方法ヲ

設ク同月君江藤新平ト共ニ廢幕ノ勘定奉行ヲ  
改メ民政會計ノ二局ヲ設置スベキノ命ヲ受ク  
新平ハ病アリ暫ク參衙ヲ辭ス故ニ君獨リ直ク  
ニ奉行所及ヒ評定所ニ至リ朝命ヲ傳ヘ大義ヲ  
諭シ一切ノ簿書ヲ收ム尋テ民政裁判所及ヒ會  
計局ヲ設置ス十月東京府判事ニ轉ス時ニ廢幕  
沒籍ノ士及ヒ普代ノ陪卒等ヲ初メ府下無産ノ  
民漸ク窮シ飢餓ニ迫ル者無數ナリ是ニ於テ君  
大木喬任等ト謀リ小金原開墾ノ事ヲ建議ス其  
大要以謂ラク下總國小金原ノ地ハ數万町ノ曠

原ニシテ未ダ嘗テ開拓ニ就カス其地味極テ桑  
茶ニ適セリ府下ノ窮民ヲシテ此地ニ移住シ開  
墾ニ從事セシメ土地五反ト家屋農具ヲ貸シ且  
ツ飲食ヲ給與スベシ此ノ貸渡セシ金ハ後年無  
利息年賦ヲ以テ還納セシムベシ惣シテ開墾ノ  
費用ハ府下ノ豪商ヲ諭シテ之ヲ辨セシメ豪商  
ニハ殘地ヲ付與シ貧富協力以テ曠原ヲ開カシ  
メハ唯窮民燒眉ノ急ヲ救フノミナラス亦以テ  
國家永世ノ利ヲ興スヘシト朝廷君ノ議ヲ可ト  
シ明治二年五月開墾局ヲ建テ君ヲ以テ知事ト

ナス此ヨリ三千餘戸ノ家屋ヲ建築シ數千ノ窮民ヲ移住セシメ因テ以テ飢餓ヲ免ル者少カラス後君ノ府任ヲ去ルニ及ンテ開墾ノ方法漸ク變シ濟急ノ意漸ク微ナリ識者或ハ以テ憾トス同年十月賞典祿百石ヲ賜フ曰ク戊辰江城新ニ定ルノ時ニ當テ專民政ヲ修メ日夜鞅掌奉職勉勵候段叡感不淺仍賞其勤勞祿百石下賜候事三年十一月東京府大參事ニ任ス四年八月官ヲ免シ御用滞在ヲ命セララル五年ノ春和歌山縣下紛紜ノ事アリ民心穩カナラス君ヲ以テ和歌山權

令ニ拜ス君任ニ赴キ之ヲ撫綏ス尋テ縣令トナル六年九月病ヲ以テ官ヲ辭ス七年ノ春佐賀縣征韓ノ亂アリ兵火ノ餘人民凋弊殺氣未タ止マズ同年四月君ヲ以テ佐賀縣令トナス人多之ヲ危ム君顧ミスシテ任ニ就ク既ニシテ士民其政ニ安ンス九年佐賀縣ヲ廢シテ之ヲ三潯縣ニ併ス君因テ官ヲ免シ京ニ上ル士民君ヲ祖賤セント欲スル者多シ君士民ヲ煩ス丁ヲ欲セス期ニ先テテ佐賀ヲ發ス既ニシテ長崎縣令トナル六月任ニ赴ク君地方官タルヤ專ラ大体ヲ持シテ

吏治ニ汲々タラス故ニ赫々ノ名ナシト雖臣民  
自カラ之ニ安ンス君素ヨリ鎮港ヲ主張ス而シ  
テ其北地ニ遊フヤ曾テ外國人ニ交リ忽チ感悟  
スル所アリ丁卯ノ冬京師ニ上リ岩倉公ヲ見テ  
其說ヲ陳フ曰ク他日大政挽回ノ後ハ攘夷ノ舊  
說ヲ變シ外交ヲ厚クシ大ニ經倫ヲ行フノ外他  
ナシト既ニシテ外交大ニ開ケ遂ニ今日ノ盛ナ  
ルニ至ル人其先見ニ服スト云

薄井龍之小傳

君字ハ飛虹通稱ハ珉二小蓮ト号ス信濃飯田ノ

人才俊ニシテ氣豪ナリ少クシテ倜儻小節ニ抱  
ラス嘗テ京師ニ遊ヒ賴三樹ニ師事シ又江戸ニ  
入り佐久間象山ノ門ニ遊フ其象山ニ從フヤ韜  
鈴ヲ講シテ大ニ發明スル處アリ以謂ラク今ノ  
兵法ナル者ハ昇平ノ久キ巳ニ華法ニ流レ復タ  
之ヲ實地ニ施スヘカラスト乃チ兵制ヲ釐革セ  
ント欲シ一書ヲ草シテ參政本多侯ヲ干ス而シ  
テ省セラレス是ニ於テ君志ヲ得ヌ去テ汗漫ノ  
遊ヲ爲ス癸丑六月ニ至リ米艦來使ノ事アリ君  
憂憤慷慨東西ニ奔走シ周旋甚タカム而シテ暮

府ノ嫌疑ヲ受ケ遂ニ水戸ニ至リ潜匿スルヲ年  
アリ元治甲子水戸ノ藩士田丸稻右衛門等義ヲ  
唱ヘ衆ヲ筑波ニ集ム藤田小四郎素ヨリ君ノ材  
幹ヲ知り君ヲ薦メテ軍謀ニ參セシム水門處々  
ノ戰屢々寡兵ヲ以幕府ノ大兵ヲ敗ルモノ君ノ  
力多ニ居ルト云事敗ルニ及ヒ二毛ノ間ニ遁レ  
テ再舉ヲ圖ル而シテ終ニ成ラス落魄スルヲ數  
年ナリ其間幕府ノ浪士ヲ索ル頗ル嚴ナリ君數  
々危殆ヲ經ルト雖モ幸ニシテ免ルヲ得タリ  
維新ノ際踴躍シテ京ニ上ル即チ參河裁判所權

判事ニ拜シ參遠駿ノ三州ヲ統理シテ頗ル政聲  
アリ其任ニ赴クニ當リテヤ修持方正絶テ侷儻  
ノ舊態ナシ故ニ民之ニ信賴ス既ニシテ開拓司  
監事ニ轉シ北地ニ赴ク辛未ノ冬ニ至リ老母疾  
アリ官ヲ辭シ東京ニ歸ル壬申ノ春山形縣權參  
事ニ任シ尋テ參事トナル君素ヨリ翰墨ヲ好ミ  
性風韻饒シ故ニ身顯職ニ在リト雖モ毫モ衣冠  
ノ習氣ヲ帶ヒス作ル所ノ詩清麗雋逸人ノ牙慧  
ヲ拾ハス其友小山春山別ニ傳目シテ牧之ノ後  
身トナス蓋シ虚シカラス著ス所歴劫詩存アリ

關雪江小傳

君ハ數世ノ名家ニシテ書ヲ以テ一世ニ鳴ル者ナリ君ノ祖思恭翁ハ鳳岡ト号ス細井廣澤ニ學フ其子其寧南樓ト号ス南樓ノ子ヲ克明ト云漢南ト号ス漢南ノ子ヲ思亮トス東陽ト号ス即チ君ノ父ナリ世々皆書ヲ以テ著ハル君名ハ思敬雪江ハ其号ナリ東京ニ住ス其ノ書ニ於ル諸体善クセサルナク書ヲ學フ者屢常ニ門ニ滿ツ而シテ君謙讓誇ヲス人之ヲ多トス世ノ書ヲ以テ家ヲ成ス者大率文辭ニ乏シ而メ君兼テ詩ヲ能

クシ工穩清綴其書ト相類ス君夙ニ大沼枕山ノ社ニ參シ植村蘆州ノ諸人ト詞壇ニ馳逐シ以テ後先ヲ競フ蘆州ハ詩ヲ以テ專門ト爲スル者ナリ君又書學ニ精シ著ス所字系數卷アリ君姉アリ絲笳女史ト稱ス亦書ヲ善ス

附錄 絲笳女史小傳

女史名ハ千代東陽ノ女ニシテ雪江ノ姉ナリ東陽ノ歿スルヤ雪江尙ホ幼シ故ニ女史ニ配スルニ琴山ヲ以テシ以テ東陽ノ後ヲ承ケテ雪江ノ長スルヲ待ツ故ニ雪江ハ女史ニ母事ス琴山名



ハ思順書ニ工ナリ女史家庭ニ學ヒテ女史ハ雪  
江ヲ子育シ書ヲ能クシ又經史ニ通ス明治五年  
官女學校ヲ創建シ大ニ女學ヲ興サントス而シ  
テ從來女史習風大率絲肉ヲ弄シ歌舞ヲ事トシ  
能ク文詞ニ通スル者アルヲナシ是ニ於テ女史  
ヲ舉ケテ女學校訓導トナス此ヨリ女兒始メテ  
學ニ嚮フヲ知リ閨秀彬々トシテ出ツ女史官  
ニ在ルヲ四年明治八年ヲ以テ沒ス官金若干ヲ  
賜フテ其功ヲ賞スト云女史子アリ思明ト曰フ  
又書ヲ善クス今司法省ニ官ス

社主兼編輯長出版人

佐田白茅

社告 此書ハ今人ノ嘉言善行ヨリ一藝一技ニ  
至ル迄苟モ榮譽ヲ成スヘキ者ハ皆之ヲ採録ス  
四方ノ君子幸ニ其聞見スル所ヲ報知セヨ且書  
中事實ヲ失フアラハ隨テ其誤ヲ正スヘシ

本局

東京蠣殻町壹丁目貳番地

大來社

正誤

佐瀬傳ノ道松雪ノ道ハ趙ノ誤リ○北島前傳ノ創業ニ做フ  
ハ做フノ字ナリ○花蹊ノ詩ニ深緑ハ深緑ナリ

印刷所

同藥研堀町三十八番地

報知社

賣捌所

大坂本町四丁目

河内屋真七

同

甲府八ヶ町

内藤傳右衛門

同

熊谷本町

博文堂

同

岩代國福島通り十丁目

近江屋周吉

三錢五厘

明治九年七月

岩倉具視小傳ノ續キ

鷺津毅堂小傳

池尻葛覃小傳

名譽新誌

第十七號



小引

此編主トスル所人ノ美ヲ成シ人ノ善ヲ  
獎ムルニ在リ故ニ上廟堂ノ偉勳鴻烈ヨ  
リ下閭閻ノ寸善小技ニ至リ聞ニ隨ヒ之  
ヲ記ス若夫一代ノ得失ハ棺ヲ蓋フテ論  
定ル且ツ善ヲ善トシ惡ヲ惡トスルハ世  
自ラ史筆ノ在ル有リ此編ノ關カル所ニ  
非ス

名譽新誌第十七號

岩倉具視公小傳ノ續キ

六年九月歸朝復命ス時ニ征韓論大ニ起リ將サ  
ニ干戈ヲ海外ニ用井ントス公及ヒ大久保木戸  
伊藤ノ諸君ハ之ヲ不可トシ議論扞格相合ハス  
臺閣諸公之カ爲メニ官ヲ辭スル者少カラス而  
シテ征韓ノ事ハ竟ニ止タリ少壯過激ノ徒ハ或  
ハ之カ爲メニ不平ヲ懷ク者アリ公ノ退朝ヲ喰  
違門外ニ要シ激徒數人齊ク發シ馬車ヲ遮リテ  
公ヲ傷ク尋テ激徒ヲ捕ヘテ悉ク之ヲ刑ニ處ス

公ノ傷ヲ受ルヤ淺シ日ナラスシテ痊ユ是ヨリ  
先三條太政大臣疾アリ數旬朝ニ參セス主上親  
カラ公ノ邸ニ臨ミ勅語ヲ賜フ  
國家多事ノ折柄太政大臣不慮ノ病患ニ懼リ朕  
深憂苦ス汝具視太政大臣ニ代リ朕カ天職ヲ輔  
ケ國家ノ義務ヲ舉ケ衆庶安堵候様龜勉努力セ  
ヨ未年十月二十日  
幾モナクシテ條公病瘉ユ因テ相共ニ大政ヲ輔  
翼スト云九年六月奥羽巡幸ノ盛事アリ公ハ駕  
ニ隨ヒ條公ハ居守ス公四子四女アリ三子ヲ具

定ト曰ヒ四子ヲ具恆ト曰フ幼名ハ八千丸ト稱  
ス時ニ二君年未タ弱冠ニ滿タス而シテ英氣ア  
ルヲ克ク父ニ肖タリ明治元年正月官軍東下ス  
具定君ハ東山道鎮撫總督ニ拜シ具恆君ハ同副  
總督ニ拜シ薩長土因大垣諸藩ノ兵ヲ率ヰテ京  
師ヲ發ス板垣退助伊地知正治宇田栗園ハ參謀  
タリ宇田ハ本營ヲ主トリ板垣伊地知ハ戰地ヲ  
主トル北島秀朝香川敬三ハ大監察タリ板垣參  
謀策ヲ進メ土州因州ノ兵ヲ遣リ甲府ヲ略定ス  
既ニシテ總督武州板橋驛ニ陣ス賊兵總野ノ間

ニ蜂起シ勤王ノ諸藩ヲ苦シム總督香川參謀等  
ヲ遣リ兵ヲ發シテ之ヲ討ツ賊將近藤勇ヲ擒ヘ  
テ之ヲ戮ス此ヨリ劇戰數回遂ニ賊兵ヲ走ラス  
總督進ミテ武州忍城及ヒ野州館林城ニ入り士  
民ヲ撫綏シテ遂ニ江戸ニ至ル六月二君共ニ職  
ヲ解キ東京ニ住ス二年二君米國ニ遊學ス具定  
君疾アリ其翌年ヲ以テ歸朝シ現今內務省ニ官  
ス具恆君ハ今英國ニ留學スト云

鷺津毅堂小傳

君名ハ宣光字ハ重光九藏ト稱ス尾張ノ人世々

文ヲ好ミ君ニ至リテ大ニ著ハル父ヲ益齋ト号  
ス温厚謹儉學ニ富メリ隱居シテ生徒ニ授ク著  
ス所四子五經說彙彞錄益齋存稿アリ其祖松隱  
翁ハ博學強記詞藻ニ敏ナリ百篇立トコロニ就  
ル盖シ其先神ハ井耳命ノ裔丹羽縣主稻萬侶ニ  
出ツト云君夙ニ家庭ニ學ヒ其業已ニ成ル弘化  
元年君方ニ弱冠ナリ伊勢ニ赴キ豬飼敬所ノ門  
ニ遊フ二年江戸ニ往キ昌平學ニ入ル旁ヲ藤森  
弘菴ニ就テ詩文ヲ正ス嘉永三年君邊患ヲ慮リ  
魏源聖武記ヲ抄シテ探要ト号シ私カニ刻シテ

同志ニ頌ツ其事幕府ノ忌諱ニ觸ル有司中ツルニ法ヲ以テセント欲ス君之ヲ避テ安房ニ往ク因テ尾州ノ籍ヲ削ラル君遂ニ下總上野ノ間ニ遊フ結城侯其學館ニ延キテ廩米ヲ給ス五年六月君結城ヲ辭シテ江戸ニ歸ル是ヨリ先ニ名ハ監字ハ文郁ト稱ス是ニ至リテ今ノ名ニ改ム幕府復タ其罪ヲ問ハサルナリ六年米艦浦賀ニ來リテ互市ヲ求ム君慨然告詰篇一卷ヲ著シ之ヲ水戸老侯ニ呈ス是ノ時ニ當リテ徳川將軍家慶薨シ家定位ニ即ク將サニ十二月ヲ以テ天使來

リ就テ大將軍ニ拜セントス藤田東湖藤森弘菴竊カニ謀リテ曰ク今ヤ幕府和戰未タ決セス若シ天使東下ノ日別勅ヲ奉シ責ムルニ膺懲ノ任ヲ以テセハ幕府或ハ反省スル所アラシク顧フニ未タ其樞機ヲ得サルノミト君其議ニ與リ乃松浦武四郎ヲ薦ム武四郎慨然之ヲ諾シテ潛カニ京師ニ赴ク君送別ノ詩アリ當時ノ情態想像スヘキナリ  
穿入京城五彩雲。昂然野鶴出鷄群。除<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>乞<sub>レ</sub>詔僧  
文覺。千歲寥々獨有君。

武四郎素ヨリ堤少納言ト交リ密ナリ乃チ少納  
言及ヒ梁川星巖池内陶所ノ周旋ヲ以テ鷹司關  
白ニ進説スルヲ得タリ關白嘉納シ遂ニ別勅  
ヲ幕府ニ降セリ以下次号ニ讓ル

池尻葛覃小傳

翁ハ久留米ノ人ナリ天質豪放ニシテ風貌雄偉  
ナリ而シテ其ノ人ニ接スルヤ誠實懇到人ヲ感  
動スルアリ嘗テ松崎謙堂ニ從テ遊ヒ勤學十年  
師弟互ニ相信愛セリ時ニ松崎氏ノ塾ニハ安井  
息軒塩谷宕陰ノ俊傑アリ而シテ翁先進タリ齒

德共ニ長シ塾長タルヲ數年ナリ翁學旣ニ成リ  
大ニ皇道ノ萎靡ヲ憤リ深ク高山仲繩蒲生君平  
ノ人ト爲リヲ慕ヒ又水藩有志ノ人ト交ヲ締ヒ  
之ヲ近クシテハ米藩ヲ興シ之ヲ遠クシテハ皇  
室ヲ振ハンヲ企望ス乃チ薩ニ入り長ニ遊ヒ  
到ル處其志慨ヲ説キ頗ル拮据尽力ス此時幕府  
勢焰翕赫翕屢々蹉跌スト雖モ敢テ屈セス遂ニ  
吾輩ト同ク上京ス時ニ朝廷頻リニ攘夷ノ令ヲ  
天下ニ下ス長州專ヲ朝命ヲ奉スト雖モ隣藩小  
倉ノ如キハ漠然トシテ其意ニ介セス唯幕府ア

ルヲ知テ朝廷アルヲ知ラサル者ノ如シ是ニ於  
テ朝命アリ翁及ヒ吾輩四名ヲシテ豊前内裡ニ  
出張シ以テ長藩ニ應援セシム内裡ハ小倉藩管  
轄ノ地ナリ嘗テ其東濱ノ地若干ヲ久留米藩ニ  
貸與ヘテ入艦場ト爲セリ因テ此命アリ翁既ニ  
内裡ニ到ル吾ハ馬關ニ往キ高杉晋作ニ謀テ大  
砲數門ヲ借來ル且ツ空砲ヲ發シ以テ開戦ノ實  
ヲ表スルヲ約ス因テ砲ヲ發セントス小倉藩  
遠カニ之ヲ止ム吾即チ髻ヲ斷シテ高杉氏ニ違  
約ノ罪ヲ謝シ因テ以テ朝命ニ背クノ事ヲ論ス

翁ハ直ニ小倉ニ往キ吾カ斷髻セルノ狀ヲ述ヘ  
且ツ百方論說シ開戦發砲ノ事ヲ半日間ニ決セ  
リ是ニ於テ漸ク發砲スルヲ得タリ此日馬關  
ノ市人砲聲ヲ聞テ喝采シ大ニ欣ンテ曰ク是レ  
九州攘夷ノ始ナリト爾後幕威益々熾ンニシテ  
七卿西下ス翁モ亦歸藩ス幾モナクシテ翁ハ本  
藩ノ獄舎ニ幽囚セラル曰ク長州同腹ノ疑アリ  
ト余時ニ三條公ノ命ヲ奉シテ兵ヲ天草ニ募ル  
歸ル則ハ幽囚タリ吾獄翁ノ獄ト隣ル昕夕言語  
ヲ接スルヲ得タリ翁ノ獄ニ在ルヤ從容書ヲ



著ハシ言語侃々タリ獄中ノ苦ヲ知ラサル者ノ  
如シ此ノ如キ者五年翁及ヒ吾共ニ再ヒ天日ヲ  
仰クコトヲ得タリ今翁年既ニ八十二近シ專ラ雲  
烟ヲ友トシ復タ時勢ニ關セス

社主兼編輯長出版人

佐田白茅

社告 此書ハ今人ノ嘉言善行ヨリ一藝一技ニ  
至ル迄苟モ榮譽ヲ成スヘキ者ハ皆之ヲ採録ス  
四方ノ君子幸ニ其聞見スル所ヲ報知セヨ且書  
中事實ヲ失フアラハ隨テ其誤ヲ正スヘシ

本局

東京蠣殻町壹丁目貳番地

大來社

印刷所

同藥研堀町三十八番地  
報知社

賣捌所

大坂本町四丁目  
河内屋真七

同

甲府八ヶ町  
内藤傳右衛門

同

熊谷本町  
博文堂

同

岩代國福島通リ十丁目  
近江屋周吉

三錢五厘

明治九年八月

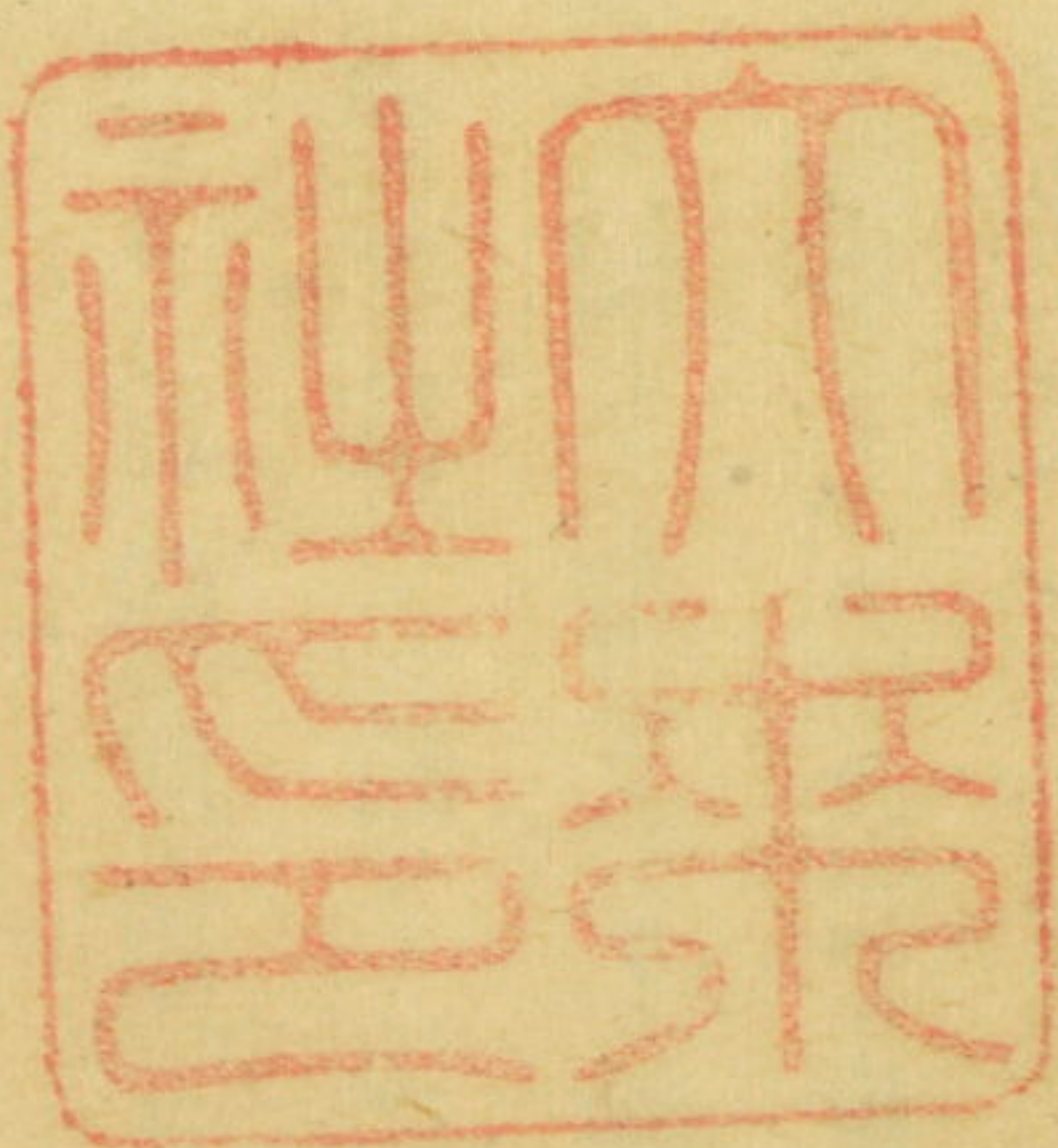
長谷信篤公小傳

成島柳北小傳

遠田澄菴小傳

名譽新誌

第十八號



小引

此編主トスル所人ノ美ヲ成シ人ノ善ヲ  
獎ムルニ在リ故ニ上廟堂ノ偉勳鴻烈ヨ  
リ下閭閻ノ寸善小技ニ至リ聞ニ隨ヒ之  
ヲ記ス若夫一代ノ得失ハ棺ヲ蓋フテ論  
定ル且ツ善ヲ善トシ惡ヲ惡トスルハ世  
自ラ史筆ノ在ル有リ此編ノ關カル所ニ  
非ス

名譽新誌第十八號

長谷信篤公小傳

公名ハ信篤字ハ平敬文政元年ヲ以テ京師ニ生  
ル公温厚和平人其德量ヲ稱ス若クシテ學ヲ好  
ミ經史ニ通ス因テ學習院ノ有識及ヒ學頭ヲ命  
セラル文久三年二月議奏ニ拜ス時ニ尊攘ノ論  
蜂起シ遂ニ大和行幸ノ事アラントス既ニシテ  
時勢俄ニ變シ大和ノ行幸ヲ止ラレ長藩宮門ノ  
警衛ヲ免ス公此ニ坐シテ參朝ヲ禁止シ幽閉セ  
ラル慶應三年正月ニ至リ始メテ幽閉ヲ解キ五

月再ヒ議奏トナル十二月王政復古ノ際參與ニ  
補セラレ尋テ議定トナル刑法事務總督ヲ兼ヌ  
明治元年三月大津裁判所總督ニ任シ近江若狹  
ノ二國ヲ管ス閏四月召命アリ京都ニ歸ル即チ  
京都府知事ニ任ヌ明治八年七月元老院議官ト  
ナル公ノ京師ニ知事タルヤ遷都ノ事アリ百官  
東ニ徙リ物議紛紜人心穩ナラス而シテ公能ク  
之ヲ鎮靜ス參事榎村正直ハ才幹アルノ士ナリ  
公能ク之ト謀リ共ニ舊弊ヲ釐革シ府治ヲ整頓  
ス故ニ政績大ニ著ルト云

成島柳北小傳

君名ハ弘字ハ保民世々幕府ニ仕ヘ儒ヲ以テ著  
ハル即チ鳴鳳卿六世ノ孫ニシテ父ヲ稼堂ト号  
ス君天保丁酉二月甲子ヲ以テ生ル故ニ甲子太  
郎ト稱ス後ニ大隅守ト稱ス年甫メテ十八温恭  
公ノ侍讀ヲ命セラレ且徳川氏實錄ノ編輯ヲ督  
ス二十歳昭徳公ノ侍講トナル君文學ヲ以テ幕  
府ノ内閣ニ在ル丁殆ント十年而シテ洋說ヲ主  
張シ動スレハ忌諱ニ觸ル且當時ノ内閣萎靡振  
ハス婦人ノ如キノ形勢アリ君之ヲ矯メント欲

シテ百方盡カス而シテ一事ノ行ハルヲナシ君  
方ニ青年氣豪ナリ慷慨過ムヘカラス遂ニ痛飲  
縱遊以テ其抑塞ノ氣ヲ泄ス又屢筆墨ヲ藉リテ  
其不平ヲ鳴ス嘗テ狂詩ヲ賦シテ權官評議臭於  
屁大府威光輕似塵ノ句アリ權貴人此詩ヲ視テ  
大ニ怒リ斯ノ如キノ狂暴書生安ソ官途ニ在ル  
トヲ得ンヤト忽チ其職ヲ免シ五十日ノ謹慎ヲ  
命ス君此ヨリ門ヲ閉テ洋學ヲ修ルト三年ナ  
リ詩アリ云

一脫朝衣臥草廬。俸多未要學樵漁。天公賜我閑

如許。須讀平生欲讀書。

舊門生其洋學ニ就クヲ嗔リ盡ク背キ去リ或ハ  
君ヲ殺サント欲スル者アルニ至ル慶應元年ノ  
秋幕府大ニ改革スル所アリ即チ君ヲ拔擢シテ  
歩兵頭トシ又騎兵頭トナス是ニ於テ君兵制ヲ  
變シテ洋法ニ倣フヘキノ議ヲ主張ス幕府其議  
ニ從ヒ君ヲシテ佛郎西ノ兵法傳習ノ事ヲ督セ  
シム因テ新營ヲ橫濱野毛山ニ築キ大ニ一二兵  
操練ノ事ヲ興ス尋テ騎兵奉行ヲ攝ス君時運ノ  
變アラシムヲ慮リ專ラ兵事ニ從ヒ筆硯ヲ抛ツ

十三年ナリ然リ而シテ幕府ノ末運百事因循復  
タ振起スルヲ能ハス君志ノ悉ク行フヲ能ハサ  
ルヲ歎シ遂ニ上表職ヲ辭ス居ルヲ幾モナクシ  
テ又外國奉行ヲ拜ス幕府危急ノ際ニ及ヒ府庫  
空乏策ノ出ス所ヲ知ラス俄カニ君ヲ舉テ會計  
ノ總裁トナシ大久保一翁ト共ニ錢穀ノ事ヲ掌  
リ參政ニ列セシム一翁ハ内務ヲ兼ルヲ以テ海  
陸軍費其他ノ會計ハ君專ラ之ヲ辨給ス慶喜ノ  
罪ヲ朝廷ニ獲ルヤ將サニ東台ニ謹慎セントス  
時ニ大臣數名ヲ召シ其事ヲ議ス君獨リ云東台

ニ屏居スル不可ナリ宜シク單行シテ京師ニ至  
リ其罪ヲ謝ス可シ臣等二三名徒跣シテ從ハン  
是レ伊達政宗磔柱ヲ荷フテ罪ヲ謝スルノ策ナ  
リ若シ然ラハ八州ノ人心必ス動搖スルヲ無カ  
ラント之ヲ争フテ夜深ニ至ル慶喜聽カスシテ  
東台ニ去ル君乃チ病ヲ以テ職ヲ辭シ骸骨ヲ乞  
フ幕府猶ホ病ヲ勉メテ事ヲ視ルヲ命ス官軍  
ノ川崎ニ進ムヤ幕人服部綾雄堀錠之助鶴殿團  
次郎等使シテ慶喜ノ爲メニ宥免ヲ乞フ官軍ノ  
先鋒將帥曰ク慶喜大逆首謀其罪宥ス可カラス

使人恐レテ歸ル此時慶喜ハ既ニ東台ニ在リ城  
中大ニ諸官ヲ會シテ之ヲ議ス一人ノ曰將軍ノ  
恭順固ヨリ數千万ノ人民ヲ鋒鏑ニ救ハント欲  
スルカ爲メナリ事茲ニ至ル將軍宜シク社稷人  
民ノ爲メニ自ヲ圖ル可キノミト衆皆默シテ一  
語ヲ發セス君憤然トシテ曰ク滿堂ノ諸君盡ク  
是レ主君ノ鴻恩ヲ荷フ者ニ非スヤ今危急ニ臨  
ミ君ヲ殺シテ罪ヲ謝スルカ如キハ諸君忍ンテ  
之ヲ爲スモ大隅ハ決シテ從フ能ハス榎本和泉  
原退藏之ニ繼ヒテ其議ヲ駁ス衆皆唯々ス君此

ヨリ復タ幕廷ニ出テス竟ニ請フテ民籍ニ入ル  
爾來汗漫飄忽東西ニ遊ヒ竟ニ歐米諸洲ニ航ス  
明治四年徵シテ左院出仕ヲ命ス君辭シテ就カ  
ス君才華雄俊詞藻富瞻筆ヲ下セハ千言立トコ  
ロニ成ル朝野新聞社君ヲ請フテ社長タラシム  
朝野社初メ弘文社ト号ス其ノ刷印スル所ノ新  
聞甚タ行ハレス君出ルニ及ンテ改テ朝野ト号  
ス是ニ至リテ旌旗ノ色一變シ筆鋒前ナシ遂ニ  
日報報知ノ二社ト鼎立スルニ至ル君ノ力ナリ  
明治九年ノ春朝野社末廣子讒謗律ニ觸テ罪ヲ

得タリ君局長タルヲ以テ亦之ニ坐シ檻倉ニ幽  
セラル、フ數月今復タ出テ社務ヲ管セリ著ス  
所柳橋新誌諸書アリ君常ニ曰フ余他ノ長技ナ  
シ唯人ト争フコトヲ好マスシテ人ニ欺カレス己  
レニ私スルコト有モ敢テ人ノ害ヲナサスト

遠田澄菴小傳

君木堂ト号ス下總佐倉ノ人ナリ脚氣ヲ醫スル  
ヲ以テ専門トシ其名一時ニ喧傳ス君少クシテ  
寒微ナリ江戸ニ來リテ官醫辻元崧菴ニ學フ德  
川慎徳公ノ病ムヤ衆醫目スルニ脚氣ヲ以テス

而シテ能ク其治方ヲ解スル者ナシ因テ君ヲ陋  
巷ニ擧ケ擢ンテ、奥侍醫ニ拜ス此レ幕府以來  
ノ特典ニ係ルト云時ニ公ノ病已ニ劇シ復タ治  
スヘカラス公遂ニ薨セリ然ル君ノ名日ニ益起  
リ殆ント獨歩ト稱スルニ至ル東京ノ地タルヤ  
卑濕ナリ夏月ニ至ル則ハ脚氣ヲ患フル者多シ  
故ニ治ヲ請フ者絡驛門ニ滿ツ脚氣ノ疾タルヤ  
洋人未タ其理ニ通セス故ニ新藥奇法モ能ク其  
功ヲ奏スルコトナク之カ爲メニ死スル者勝テ數  
フヘカラス君之ヲ憂ヒ治療所ヲ横濱ニ開キ以



テ内外ノ患者ヲ救フ清人江猷書許蕉雲ノ諸人  
モ皆君ニ詣リテ治ヲ乞ヘリ君人トナリ滑稽多  
智博ク諸史ニ涉リ兼テ詩ニ通ス年巳ニ耳順ニ  
垂ントシテ意氣猶少壯ノ如ク斗酒ヲ飲テ亂レ  
スト云

本月社中休業ニ付二号出版

社主兼編輯長出版人

佐田白茅

社告 此書ハ今人ノ嘉言善行ヨリ一藝一技ニ  
至ル迄苟モ榮譽ヲ成スヘキ者ハ皆之ヲ採録ス  
四方ノ君子幸ニ其間見スル所ヲ報知セヨ且書  
中事實ヲ失フアラハ隨テ其誤ヲ正スヘシ

本局

東京蠣殻町壹丁目貳番地

大來社

印刷所

賣捌所

同

同

同

同業研堀町三十八番地

報知社

大坂本町四丁目

河内屋真七

甲府八ヶ町

内藤傳右衛門

熊谷本町

博文堂

岩代國福島通リ十丁目

近江屋周吉

三錢五厘

明治九年八月

松本喜三郎小傳

田島彌平小傳

山田顯義小傳

名譽新誌

第十九號



小引

此編主トスル所人ノ美ヲ成シ人ノ善ヲ  
獎ムルニ在リ故ニ上廟堂ノ偉勳鴻烈ヨ  
リ下閭閻ノ寸善小技ニ至リ聞ニ隨ヒ之  
ヲ記ス若夫一代ノ得失ハ棺ヲ蓋フテ論  
定ル且ツ善ヲ善トシ惡ヲ惡トスルハ世  
自ラ史筆ノ在ル有リ此編ノ關カル所ニ  
非ス

名譽新誌第十九號

松本喜三郎小傳

君ハ肥後熊本ノ人ナリ幼ヨリ好ミテ木偶ヲ彫  
刻シ研精苦思スル丁年アリ二十歳ニ至リ始メ  
テ骨格肉色ヲ摸スルノ方ヲ悟リ其造ル所ノ偶  
人ヲ以テ觀場ニ供ス偶人ノ形宛然活ケルカ如  
シ觀客大ニ歎賞シ活人形ト稱ス此ヨリ活人形  
ノ稱漸ク諸國ニ喧シ即チ京攝ニ上リ東京ニ入  
リ到處奇工ヲ呈シ觀者ヲシテ喝采止マサラシ  
ム是ニ於テ活人形ノ名遂ニ天下ヲ動セリ其西

國三十三所靈驗記ノ奇觀ヲ設クルニ當テヤ奇  
工尤秀形容眞ニ逼ル故ニ觀客群ヲ成シ開場ノ  
久五年ニ彌ルト云是近世ノ希ナル所ナリ君ノ  
大阪ニ在ルヤ同國ノ人ニシテ兄弟門ニ入ル者  
アリ既ニシテ君ノ技能ヲ妬ミ君ヲ害セント欲  
シ藝州ノ匠人某ニ托シテ君ヲ殺サシム藝匠素  
ヨリ暴癡ヲ以テ聞ユ即チ數百金ヲ受ケテ之ヲ  
諾ス一夜君ノ宅ニ至ル君其ノ來ル所以ヲ問フ  
曰ク君ヲ害セントシテ來ル君驚懼シテ哀ヲ求  
ム匠笑曰ク吾豈ニ君ヲ害スルニ忍ンヤ然レ君

ノ門人某吾ニ托シテ君ヲ除ク爲メニ金數百兩  
ヲ賂フ吾既ニ其金ヲ受ク勢徒ヲニ止ムヘカラ  
ス吾將サニ逃亡セントス故ニ君ニ告ルニ實ヲ  
以テス君自愛セヨ君再拜其忝ヲ謝シ且ツ貽ル  
ニ金ヲ以テス匠此ヨリ亡命ス君ハ門人ノ己ヲ  
謀ルヲ聞キ怒ルヲ甚シト雖レ敢テ之ヲ官ニ  
鳴ラサス唯其人ヲ絶チ門人ノ籍ヲ削レリ後其  
ノ者君ノ名ヲ冒シテ所謂活人形ノ觀場ヲ開ク  
君亦之ヲ咎メス知ル者皆君ノ寬量ヲ稱ス當時  
東京淺草寺内ニ住シ活人形ノ名益高シ

田島彌平小傳

田島彌平名邦寧字子寧上毛島村ノ人ナリ家世農ヲ業トシ養蠶術ヲ以テ尤モ世ニ噪シ性才アリ識アリ全力ヲ其ノ術ニ悉シ前人未發ノ論甚タ多シ曾テ朝ニ徵サレテ諮詢ヲ被リ特ニ命シテ之ヲ褒シ乃チ諸州ノ蠶商ヲ惣括セシム又中宮躬カラ蠶ヲ養フニ當テ其ノ女多美ヲシテ之カ師タラシム眞ニ不世ノ榮ト謂ヘシ其ノ說ニ曰ク蠶ヲ養ニハ必ソノ室ヲ高シソノ四窓ヲ啓キ清風ヲ納メ赤日ヲ障テ群蠶ヲシテ灑然ノ

快ヲ受シムベシト毎歲製スル所ノ蠶種ヲ洋商ニ輸スルニ彼レ價ヲ倍シテ之ヲ償ヒ以テ宇内ノ絶品ト稱セリ嗚呼蠶種ハ實ニ邦國生息ノ産物ニシテ國ヲ富シ家ヲ利スソノ功大ナリ今ソノ全力ヲ此ニ灑テ益マスソノ術ヲ擴充セント欲ス吾輩焉ソ之ヲ激賞セザルヲ得ンヤソノ著ス所ノ養蠶新論二卷盛ニ世ニ行ル弟定邦客歲命ヲ蒙リ札幌ニ往キノ家法ヲ以テ始テ蠶業ヲ試ミ桑柘ヲ培フ果シテ大ニ豐殖ス蠶桑餘事一卷ヲ編ス

山田顯義小傳

君通稱ハ市之允空齋ト号ス長州ノ藩士ナリ夙ニ尊攘ヲ唱ヘテ屢京師ニ來往ス文久三年八月輦下ノ變七卿ニ隨テ西下シ途兵庫ニ至ル君同志ト謀ル所アリ此ヨリ再ヒ京師ニ入リテ潜伏ス冬ニ至リテ遂ニ國ニ歸ル歸ル則ハ來島又兵衛等ト同志ヲ募リ兵隊ヲ編成ス是ニ於テ君狙擊隊長ト爲ル元治元年春故アリ高杉春風ト同シク國ヲ脱シテ京師ニ至リ將サニ爲スヲアラントス時ニ武田耕雲齋等兵ヲ野州太平山ニ舉

ク即チ同志ノ士田村育藏有川恆槌等ト之ニ赴カント欲シ江戸ニ到ル道路梗塞達スルヲ得ス同年秋長兵天王山ニ屯スト聞キ江戸ヲ發シテ之ニ會ス廿八日ノ戰久坂通武眞木和泉守ニ從ヒ堺町御門ニ到リ會越井伊兵ト接戦ス巳ニシテ戰敗レ國ニ歸ル九月英佛米蘭ノ戰艦來リテ馬關ヲ襲撃ス君馳テ之ニ赴キ屢奮戦ス同年冬幕府討長ノ命ヲ發ス七卿長ヲ去テ筑前ニ遷ル是ニ於テ長藩俗論蜂起シ悉ク正議ノ徒ヲ芟刈セント欲ス慶應元年正月高杉春風太田直方

等俗論黨ヲ擊テ之ヲ破ル是時君御楯隊軍監ト  
ナリ大ニ其力ヲ致ス二年ノ夏幕府再ヒ長藩ヲ  
討テ大ニ兵ヲ藝州ニ出ス幕ノ兵船防州近海ニ  
出沒シ屢戰ヲ挑ム君高杉春風ト謀リ共ニ丙寅  
艦ニ乘リ大島郡來攻ノ幕軍ヲ夜襲ス幕軍ヲ攻  
擊スル者此舉ヲ以テ始トス此役ヤ君大砲司令  
士タリ御楯隊軍監故ノ如シ尋テ御楯隊ヲ率井  
テ藝州ノ境ニ出テ小瀧久波大野松ケ原ノ間ニ  
戰ヒ屢幕軍ヲ破ル三年御楯隊鴻城隊ト合併シ  
整武隊ト号ス君ヲ以テ惣督ト爲ス同年十二月

幕府命アリ毛利氏ノ家老ヲ大阪城ニ召ス長州  
侯毛利親信ヲ遣リ君ヲ以テ參謀トス即テ海陸  
數隊ヲ率井テ攝州西宮ニ到ル特詔アリ直テニ  
京師ニ入ラシム即テ東山東福寺ニ陣ス明治元  
年正月伏見ノ役アリ君ヲ以テ征討惣督仁和寺  
宮ノ副參謀ニ任ス三月國ニ歸リ五月第一丁卯  
艦ニ乘リ越後ニ赴ク七月海陸軍參謀ニ任ス此  
ヨリ出雲崎新潟新發田等ニ戰ヒ悉ク之ヲ平定  
ス夏秋ノ交秋田屯在ノ官軍勢頗ル窘迫ナリト  
聞キ君馳テ上京シ其狀ヲ陳ス是ニ於テ長州兵

士千餘人秋田出張ノ命アリ君直チニ國ニ歸リ  
整武隊ヲ率井テ秋田ニ赴ク時ニ冬十月ナリ奥  
羽ノ賊悉ク平ク此ヨリ先キ榎本釜次郎等軍艦  
數艘ヲ領シテ箱館ニ據ル軍務官君ヲシテ直チ  
ニ青森ニ至リ榎本等ヲ掃攘セシム時ニ天寒ク  
雪深クシテ百事爲ス可カラズ因テ明年四月暖  
氣漸ク催スノ時ヲ待チ海陸諸軍ヲ整頓シ箱館  
ノ賊兵ヲ攻撃ス此時更ニ陸軍參謀兼海軍參謀  
ヲ命ス五月賊徒降伏シ東京ニ凱旋ス歸ル則ハ  
參謀ヲ解キ尋テ兵部大丞ニ任ス二年九月君ノ

軍功ヲ賞シ永世ノ賞典六百石ヲ賜フ曰ク戊辰  
ノ秋北越ニ出張海軍ニ參謀シ再懸軍羽州ニ在  
リ流賊北邊ニ入ルニ及ンテ奥羽總督ノ命ニ應  
シ軍ヲ青森ニ屯シ更ニ參謀ノ命ヲ奉シ己巳之  
春遂ニ進ンテ蝦地ニ入り畫策其宜ヲ得攻撃無  
前竟ニ賊巢ヲ舉ケ平定ノ功ヲ奏候段叡感不斜  
仍爲其賞高六百石下賜候事三年ノ春君命ヲ奉  
シテ大坂ニ至リ兵學校ヲ建築シ生徒ヲ召集シ  
徵兵ノ基礎ヲ建テ戎服ノ製ヲ定メ軍事病院器  
械製造所及ヒ諸兵營等ヲ造建ス四年七月陸軍



少將兼兵部大丞ニ任ス十一月岩倉特命全權大使ニ隨ヒ理事官ヲ以テ歐米ヲ巡行シ各國ノ兵制及ヒ兵部ノ事務ヲ質問シ六年六月歸朝ス七月東京鎮臺司令長官トナル尋テ免ス陸軍少將タルヲ故ノ如シ七月佐賀ノ亂アリ君内務卿ト共ニ兵ヲ率ヰテ西下ス即チ奮戰健闘大ニ賊兵ヲ破リ旬日ニシテ平ク五月東京ニ凱還ス六月宮中ニ於テ勅語アリ曩ニ佐賀縣ノ役福岡縣新募ノ兵ヲ率勵シ險地ニ向ヒ賊銃ニ當リ戰闘盡力速ニ平定ノ功ヲ奏ス朕深ク之ヲ嘉賞ス

社主兼編輯長出版人

佐田白茅

社告 此書ハ今人ノ嘉言善行ヨリ一藝一技ニ至ル迄苟モ榮譽ヲ成スヘキ者ハ皆之ヲ採録ス四方ノ君子幸ニ其聞見スル所ヲ報知セヨ且書中事實ヲ失フアラハ隨テ其誤ヲ正スヘシ

本局

東京彌穀町壹丁目貳番地  
大來社

雪江小傳屢常ハ屢ノ誤○專門ト爲スル者ノルハ衍字○女史ハ雪江ヲ子育シノ九字ハ移シテ雪江ハ女史ニ母事スノ上ニ置ク○從女史ノ史此ヨリ女兒ノ兒共ニ子ノ誤

印刷  
賣捌所

同藥研堀町三十八番地

報知社

賣捌所

大坂本町四丁目

河内屋真七

同

甲府八ヶ町

内藤傳右衛門

同

熊谷本町

博文堂

同

岩代國福島通り十丁目

近江屋周吉



明倫彙編 家範典 卷三十三

此至

水如江